

# 安行 3b 式期における東西関東の地域間関係

## — 姥山式土器の検討を中心に —

田邊 えり

### 要旨

縄文時代晩期の関東地方では、晩期前葉の安行 3b 式期に東西関東で地域差が生じ始め、晩期中葉には明確な型式差として表出する。縄文時代後期後葉から関東地方のほぼ全域で齊一的に分布していた伝統的な安行式が西部地域で受け継がれていく一方、東部地域独自の地域色が強まる時期と言える。東西差出現の画期となる重要な時期でありながら、安行 3b 式期に東部地域を中心に分布する姥山式に関する研究は非常に少ない。そこで本稿では、姥山式の基礎研究を行うことで、安行 3b 式期における東西関東の地域間関係を明らかにすることを目的とした。

本稿では第一に、佐藤達夫の異系統土器論を用いて姥山式の捉え方を明らかにした。系統としての型式という捉え方により、安行 3b 式と同等の影響を持つ土器群として位置づけた。さらに、研究史で長らく問題となっている姥山Ⅱ・Ⅲ式の区分については、本稿では縄文の有無に関わらず安行 3b 式期に併行する土器群を姥山式と捉えることから、姥山式の細別は行わないこととした。以上の定義を踏まえ、近年急増した姥山式土器の集成をもとに型式内容の再整理を行った。第二に、安行 3b 式と姥山式の大波状口縁深鉢形土器の分布分析により、大宮台地にいたる広範囲で両者が共存状態にあることを明らかにした。大宮台地に存在する「姥山系」と呼ばれる土器群の詳細を分析した結果、それらは姥山式とほぼ相違なく、安行 3b 式期には異系統土器の要素の混合があまり進んでいないことを示した。

以上の土器様相から、安行 3b 式期には伝統的な安行式を引き継ぐ西部地域の影響力が縮小し、かわりに東部地域の影響力が拡大していくことがわかった。安行 3b 式は前後の土器型式と比較して非常に不安定であり、この点も西部地域の影響力の縮小と連動していると考えられる。さらに、安行 3b 式と姥山式という異系統共存状態の解釈としては、背景に製作者を含めた人々の活発な移動が想定できるが、さらなる議論のためにはより多角的な分析が必要であると結論付けた。

### 1. はじめに

縄文時代晩期前半期の関東地方では、土器型式に大きな変化がみられる(図1)。後期後葉から関東地方のほぼ全域で齊一的に分布していた安行式が、晩期前葉の後半になると東西差が生じ始め、中葉には明確な型式差として表出する。西部地域で伝統的な安行式が晩期中葉まで連綿とつづく一方、東部地域では独自の地域色が強まっていく時期と言える。本稿で中心的に扱う安行 3b 式期は、東西差が生じ始める画期となる時期であり、生業の多様化、集約化や儀礼祭祀の活発化といった縄文時代後晩期に急速に進んだ社会複雑化を検討する上でも重要な時期の一つであると考えられる。

関東地方における縄文時代晩期の土器型式研究は、山内清男が設定した安行式(山内 1928)を主軸として進められてきた。安行式土器の研究の深化に伴い、晩期安行式の地域性についても論じられるようになった。その一つが、鈴木公雄が提唱した姥山式である。鈴木は、安行 3b 式期に関東東部地域を中心に分布する土器型式として、姥山Ⅱ式を提唱した(鈴木 1963・1964a、図2)。70年代には姥山Ⅱ式の存在

を裏付ける報告が相次ぎ(相山・金子 1972、八幡編 1973 など)、安行 3b 式との文様や分布圏の違いが明らかになった。しかし、80年代の姥山Ⅱ・Ⅲ式問題での熾烈な議論を経た90年代以降、姥山Ⅱ式についての研究は急激に失速した。それから現在に至るまでの姥山Ⅱ式に関する論文数は、非常に少ない。型式の認定に有効な一括資料に恵まれなかったこともあり、提唱後の研究がなかなか深化せず、姥山式の位

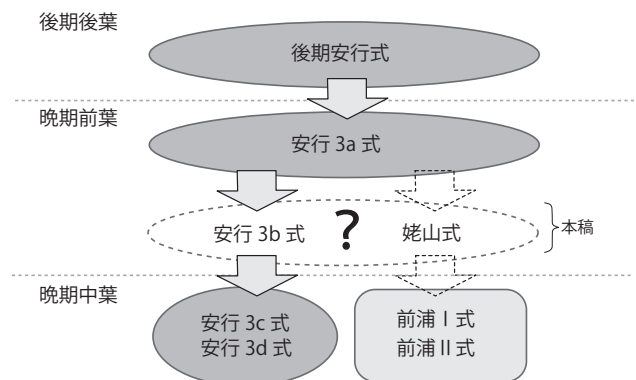
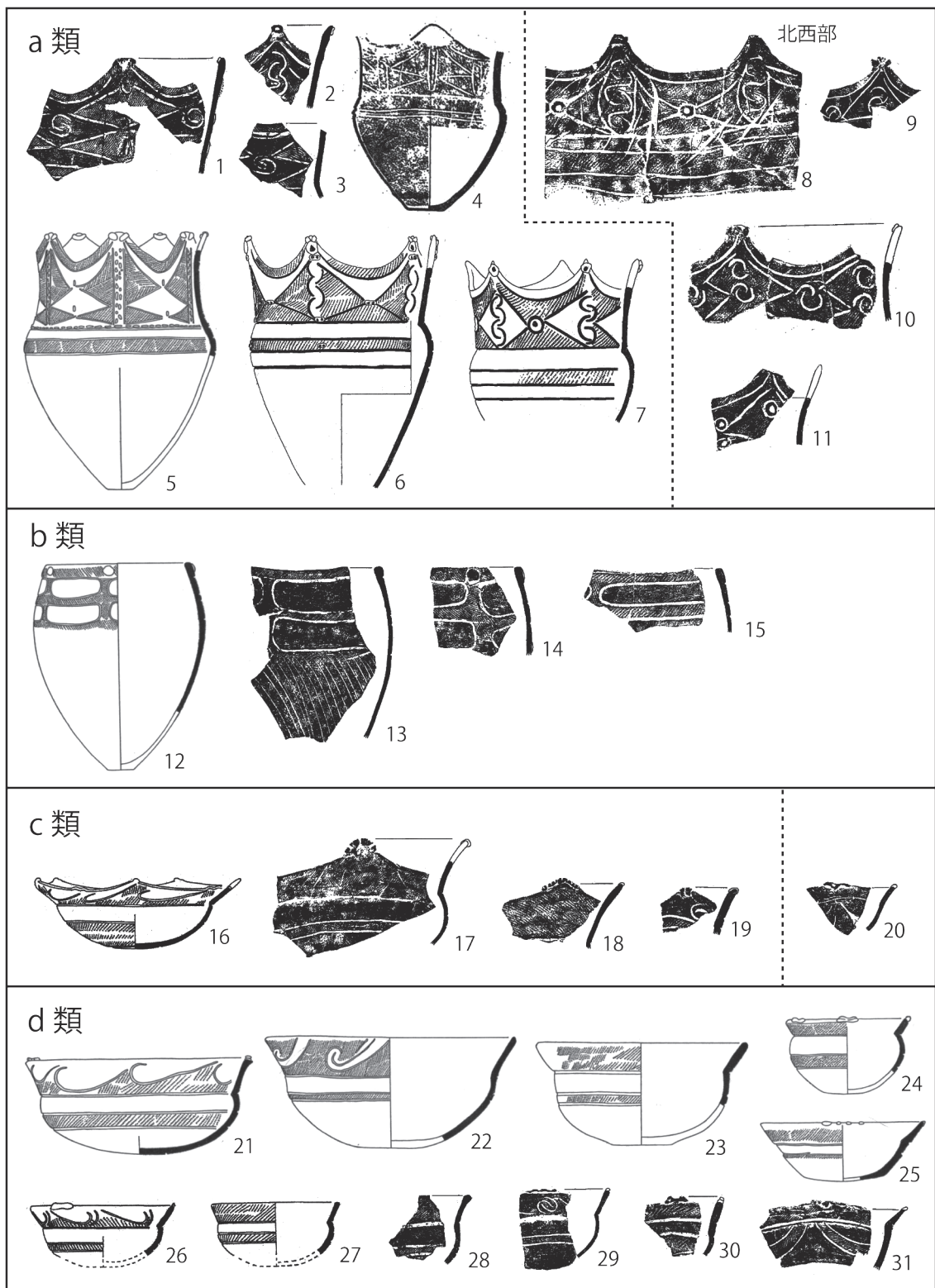


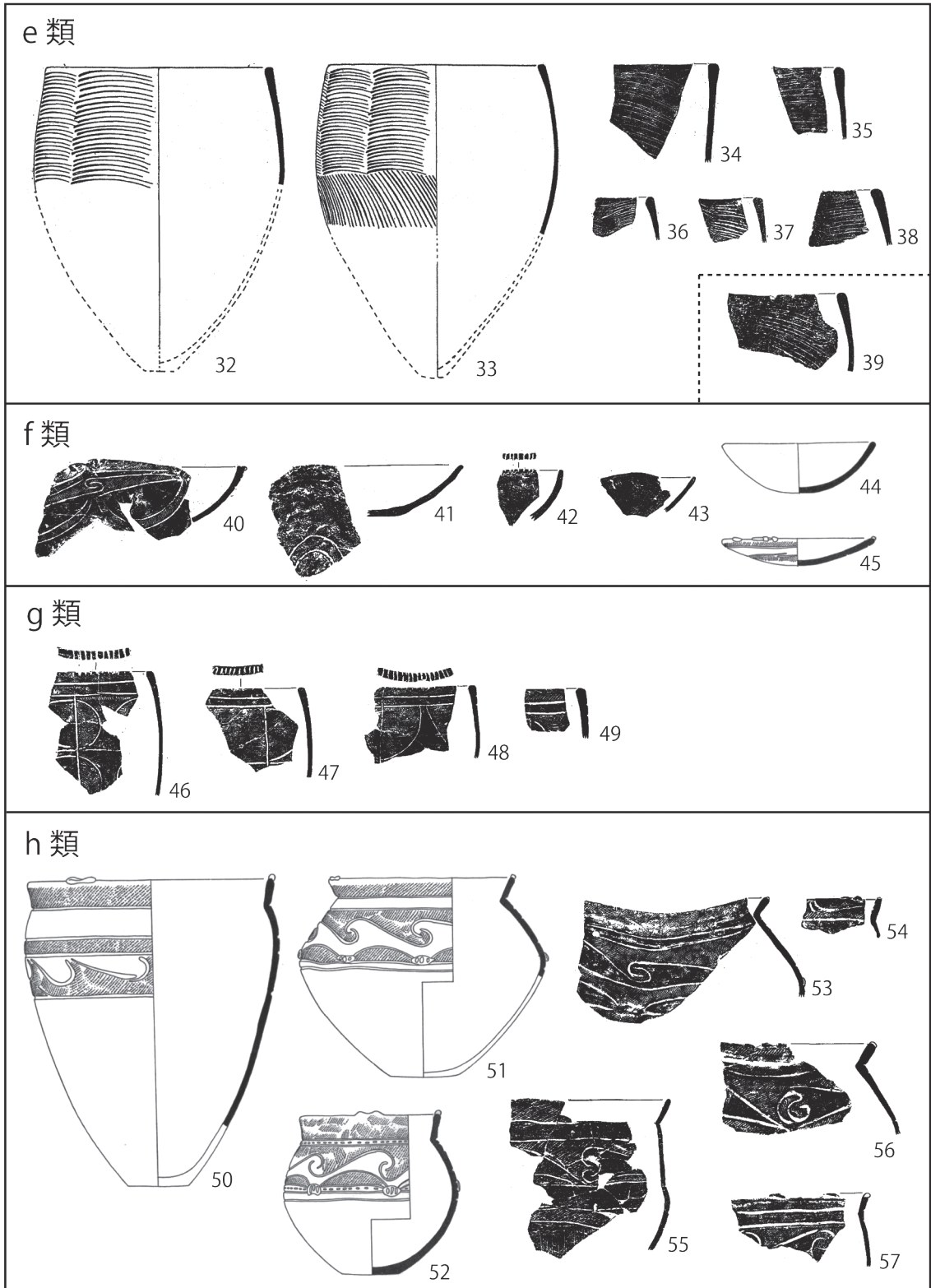
図1 関東地方における縄文時代晩期前半期の土器型式模式図



千葉県域：山武姥山貝塚 (1~4・13・17・18・28・34・35・40・47・48・53・54)  
 多古田遺跡 (5・12・21~25・44・45・50~52) 荒海貝塚 (14・29・30・38・57)  
 久方貝塚 (16・26・27・32・33)

0 10cm  
 (S=1/8)

図2-1① 鈴木公雄による姥山Ⅱ式分類



茨城県域：築地遺跡 (6・7・15・19・31・36・37・41~43・46・49・55・56) 埼玉県域：真福寺貝塚 (8・9) 膝子貝塚 (10) 群馬県域：板倉沼遺跡 (11・20・39)

0 10cm  
(S=1/8)

図 2-② 鈴木公雄による姥山Ⅱ式分類

置づけや実態は依然として非常に曖昧なままである。よって、姥山式の実態解明は、土器型式研究としての意義も大きい。

そこで本稿では、近年出土量が急増している姥山式の集成を行い、安行 3b 式との分布範囲の比較や詳細な文様の観察、分析を通して姥山式の実態解明に取り組んだ。明らかになった土器様相に基づき、安行 3b 式期の東西関東における地域間関係を検討する。

## 2. 姥山Ⅱ式の研究史

### 2-1. 晩期安行式の確立

安行式土器は、山内清男によって設定された（山内 1928）。山内は、「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」（山内 1930）において、亀ヶ岡式土器を大洞式として細別し、大洞式との共伴関係によって関東地方の土器年代を確定していった。安行式は、縄文時代後期後葉から晩期中葉にかけて存在するが、大洞式と共伴する安行 3a 式以降が晩期と定められている（表 1）。山内は、安行式を 1～3 式の 3 型式に区分し（山内 1934）、さらに、晩期に比定した安行 3 式を 3a、3b、3c 式の 3 つに細分した（山内 1940・1941）。その後、神奈川県横浜市杉田遺跡および桂台遺跡（杉原・戸沢 1963）や埼玉県さいたま市奈良瀬戸遺跡（國學院大學考古学会 1963）の調査報告に基づき、山内は、大洞 C2 式を伴う型式を安行 3d 式と定め、現在までつづく細分の大枠となる晩期安行式の 4 細分が確定した（山内 1964）。晩期安行式についての議論が盛んになる中、前浦式（西村 1961）や姥山式（鈴木 1963・1964a）といった関東東部地域にみられる地域性についても指摘されるようになった。

### 2-2. 姥山Ⅱ式の提唱

姥山式は、千葉県山武郡横芝光町山武姥山貝塚の資料をもとに、鈴木公雄によって提唱された（鈴木 1963）。鈴木は姥山Ⅰ～Ⅵ式を設定し、姥山Ⅰ式が安行 2 式併行、姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式が安行 3 式併行、姥山Ⅳ式が前浦式・大洞 C2 式併行、姥山Ⅴ式が大洞 A 式併行、姥山Ⅵ式が荒海式併行とした。姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式は同一層内からの出土が確認されていたが、安行 3 式において縄文の消滅現象が新しい型式にみられることから、縄文の有無によって姥山Ⅱ・Ⅲ式の区別がなされ、縄文を有さない姥山Ⅲ式が比較的新しい型式として位置づけられた。

鈴木は翌年、茨城県常総市築地遺跡をはじめ、数遺跡の資料を追加し、姥山Ⅱの内容をより具体化して示した（鈴木 1964a、図 2）。姥山Ⅱ式は、晩期安行式との文様比較によって安行 3b 式併行期に位置づけられ、器形や文様の点で安行 3b 式とは大きく様相を異

表 1 土器型式併行表

	西関東	東関東	東北
晩期前葉	安行 3a 式		大洞 B1・B2 式
	安行 3b 式	姥山式	大洞 BC 式
晩期中葉	安行 3c 式	前浦Ⅰ式	大洞 C1 式
	安行 3d 式	前浦Ⅱ式	大洞 C2 式

にすることから、安行 3b 式とは異なる一つの土器型式として認定できると鈴木は考えた。鈴木が「稲妻状磨消文様」と呼んだ菱形区画と入組弧線文や列点文、円圏文の組合せが施される大波状口縁深鉢形土器（a 類）や、細密沈線文を有する平口縁深鉢形土器（g 類）、条線のみ粗製土器（e 類）など、姥山Ⅱ式には鈴木 の指摘通り、伝統的な安行式とは異なる要素が多分に含まれている。姥山Ⅱ式の提唱後、鈴木はさらに千葉県匝瑳市久方貝塚の資料（鈴木 1965）や同市多古田遺跡出土資料（鈴木 1982）、埼玉県岩槻市真福寺泥炭層遺跡出土資料（清水・鈴木 1966）などに基づいて、姥山Ⅱ式の存在を強調した。

その後、千葉県富津市富士見台遺跡の調査（椛山・金子 1972）をはじめ、千葉県松戸市貝の花貝塚（八幡編 1973）、茨城県つくば市小山台貝塚（永松他 1976）、千葉県千葉市加曽利南貝塚（杉原編 1976）、千葉県市原市西広貝塚（米田他編 1977）など 70 年代に姥山Ⅱ式の出土が相次ぎ、安行 3b 式との文様や分布圏の違いが次第に明らかになった。こうして、姥山Ⅱ式という土器群の存在は、概ね共通認識となった。

### 2-3. 姥山Ⅱ・Ⅲ式をめぐる議論

鈴木公雄が縄文の有無によって姥山Ⅱ式とⅢ式を区分し、時期差と捉えたことに対しては、提唱当時から批判的な意見もみられた。杉原荘介と戸沢充則は、姥山Ⅱ・Ⅲ式が同一層中から出土しており、なおかつ複数遺跡において主な出土は姥山Ⅱ式であることから、両者を同一型式内のバラエティと捉えるべきではないかと指摘している（杉原・戸沢 1964・1965）。出土量の少なさから、姥山Ⅲ式の存在自体に疑問を呈する声もあった。前浦式の 2 細分を確立した鷹野光行は、前浦Ⅰ式を姥山Ⅱ式に後続する土器群と考え、姥山Ⅲ式の存在を明確に否定した（鷹野 1978）。藤本弥城は、茨城県稲敷市広畑貝塚で確認された安行 3c 式の層位中に姥山Ⅲ式がみられないとし、両者に関連がないことを指摘した（藤本 1988）。

鈴木公雄は、1980 年代に自説を覆し、姥山Ⅱ式が関東東部地域の分布、姥山Ⅲ式が関東西部地域の分布として両者を地域差と捉え直した（鈴木公 1981）。従来の安行 3b 式ではなく、姥山Ⅲ式を伝統的な安行式の系譜に位置づけた鈴木の見解は、鈴木正博らによ

って痛烈な批判を受けた（鈴木・鈴木 1982）。鈴木正博と鈴木加津子は、後期以降の伝統的な安行式の流れは、安行 3b 式、3c 式、3d 式という山内清男が提示した通りであるため、姥山Ⅱ式は飽くまで安行 3b 式の地域性であるという点を強調した。翌年、鈴木らは、埼玉県さいたま市裏慈恩寺遺跡出土資料をもとに、安行 3c 式の 4 細分を行った（鈴木・鈴木 1983）。そこで、姥山Ⅱ・Ⅲ式を時期差と捉え、安行 3b 式～3c 式期にかけて併行するという編年観を提示した。

姥山Ⅱ・Ⅲ式が地域差としては確認できないとする点は研究者間で概ね一致しているものの、両者を時期差と捉えるか、同時期のバラエティと捉えるか、そもそも姥山Ⅲ式を設定すべきか等、姥山Ⅱ・Ⅲ式をめぐる議論は現在に至るまで結論にたどり着いていない。

## 2-4. 安行 3b 式との併行関係

鈴木公雄は、安行 3b 式と姥山Ⅱ式の併行関係について、晩期安行式の特徴との比較によって導きだした（鈴木 1964a）。安行 3a 式に特徴的な三叉文の欠如や、安行 3c 式に特徴的な列点文の欠如、逆に、安行 3c 式では消失する縄文の施文等の特徴から、姥山Ⅱ式が安行 3a 式より新しく、3c 式より古い様相を呈することを示した。

また、土器一個体にみられる文様の共存からも同時期性が示されている。鈴木正博と鈴木加津子は、安行 3b 式と姥山Ⅱ式の文様要素が混在した土器の存在から、両者の併行関係を指摘した（鈴木・鈴木 1982、図 3）。鈴木らが示した埼玉県さいたま市黒谷田端前遺跡出土土器と桶川市高井東遺跡出土土器は、姥山式の文様構成が基本となっているが、曲線的な区画線や磨消弧線文、入組文等、姥山Ⅱ式にはみられない伝統的な安行式の要素が確認できる。特に入組文は、山内清男が安行 3b 式平口縁深鉢形土器の大きな特徴とみなしたもので（山内 1941）、姥山Ⅱ式と安行 3b 式の文様の混在が明らかである。

大洞式や安行式との明確な共存関係から姥山式との併行関係を導きだすことは、現在でも極めて困難な状況にある。しかし、前後にあたる安行 3a 式と前浦

I 式が大洞式との併行関係が明らかであることから、安行 3b 式との併行関係に矛盾が指摘されることはなく、研究史を通じてその妥当性は担保されてきたと言える。

## 2-5. 近年の研究

1990 年代以降の姥山式についての研究は非常に少ない。編年研究としては、福田礼子によって姥山Ⅱ式の変遷過程が提示された（福田 2006）。福田は、縄文の有無に関わらず同様の変遷過程を辿れることから、姥山Ⅱ・Ⅲ式を時期差ではなく同時期のバラエティと捉えた。また、姥山Ⅱ式大波状口縁深鉢土器の成立過程（江原 2016）や、平口縁深鉢形土器の成立過程（宮内 2011）について論じた研究もある。

## 3. 本研究の方針

### 3-1. 研究の目的

以上の研究史から、姥山式に関する研究の停滞が顕著な問題として指摘できる。90 年代以降の基礎研究は数えるほどで、姥山Ⅱ・Ⅲ式の問題も依然として解決していない。一括資料や層位的に良好な資料に恵まれず、方法論的な課題が大きいことは承知の上でも、着実に増加した資料の集成をはじめとした可能な限りの基礎的研究の蓄積が急務の課題と言える。安行 3b 式期は、関東地方の東西で地域差が生じ始める重要な時期でありながら、姥山式の捉え方や安行 3b 式との関係性についての議論は一向に進んでいない。姥山式の分布の中心である関東東部地域の理解のためにも姥山式の基礎的研究は不可欠である。また、縄文時代後晩期に急速に進んだ社会複雑化の解明のためにも、土器の様相を明らかにし、基本的な地域間関係を理解することは非常に重要である。

よって本稿では、具体的な研究が非常に少ない姥山式の実態や位置づけを検討し、安行 3b 式期の基礎的な土器研究を行うことを第一の目的とする。第二に、明らかになった土器様相に基づき、縄文時代晩期前中期の地域間関係を考察することによって後晩期社会の理解を深めることを目的とする。

### 3-2. 研究の方法

本稿ではまず、姥山式の捉え方を明らかにする。本稿における姥山式の定義と土器群の内容について整理する。

次に、安行 3b 式と姥山式の大波状口縁深鉢形土器の分布分析から、両者の影響関係を確認する。大宮台地に分布する「姥山系」と呼ばれる大波状口縁深鉢形土器の詳細な文様の分析から、その実態を明らかにし、姥山式の分布をより正しく把握する。

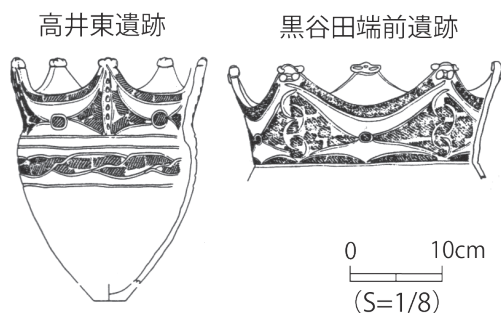


図 3 安行 3b 式と姥山式の同時期性を示す資料



図4 分析対象遺跡分布図

最後に、明らかになった土器様相から、安行 3b 式期の東西関東における地域間関係を考察する。

### 3-3. 対象地域

本稿での分析対象遺跡を図4、表2に示した。関東地方の中で安行 3b 式期の資料が特に充実している千葉県全域、埼玉県東部地域、茨城県南部地域の遺跡を中心に扱った。対象遺跡数は、千葉県域で 32 遺跡、埼玉県域で 25 遺跡、茨城県域で 10 遺跡、栃木県域で 3 遺跡、群馬県域で 1 遺跡の計 71 遺跡である。

### 3-4. 時間軸の整理

本稿での基本的な編年観を表1にまとめた。大洞式との併行関係は本稿で具体的に触れることはないが、先行研究をもとに参考として掲載した。本稿では姥山Ⅱ・Ⅲ式を区分しないため、安行 3b 式と姥山式を併行させている。詳細は後述の姥山式の捉え方を参照頂

きたい。晩期安行式編年は、新屋雅明のものを参考にしてしている(新屋 1992)。新屋は、大宮台地の豊富な資料をもとに晩期安行式に関する論考を数多く発表している(新屋 1991・1996・2004・2008)。近年の論考の中では最も体系的な研究と考えたため、本稿で参考とすることにした。また、前浦式は、前浦Ⅰ・Ⅱ式に2細分する鷹野編年(鷹野 1978)を採用している。晩期中葉の土器群は本稿では主な分析対象ではないため、中葉の時間軸設定については晩期中葉の土器群を扱うことを予定している別稿にて詳述したい。

## 4. 姥山式の捉え方

### 4-1. 系統としての型式

#### 4-1-1. 鈴木公雄のセット論

姥山式が抱える問題の一つが、姥山式を型式と捉えるか、安行 3b 式の地域性と捉えるかという点である。提唱者である鈴木公雄は、自身が唱えた「セット論」

表 2 分析対象遺跡一覧

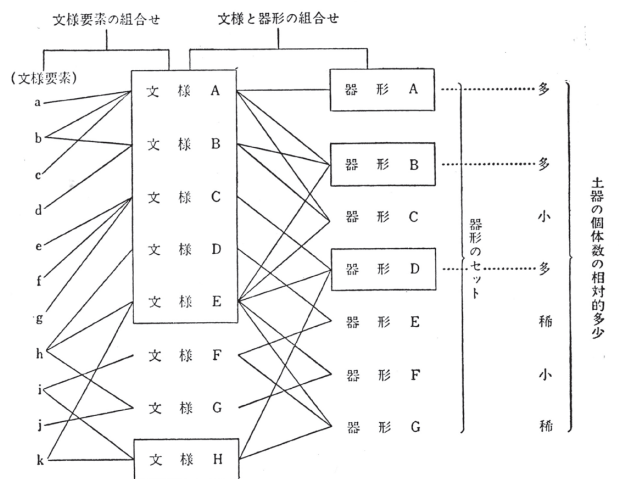
埼玉県		25	飯能市	中橋場遺跡	47	成田市	公津原遺跡
1	熊谷市	群馬県			48	千葉市	内野第一遺跡
2	鴻巣市	26	邑楽郡板倉町	板倉遺跡	49	佐倉市	井野長割遺跡
3	加須市	栃木県			50	佐倉市	吉見台貝塚
4	桶川市	27	小山市	乙女不動原北浦遺跡	51	四街道市	嶋越遺跡
5	桶川市	28	小山市	寺野東遺跡	52	四街道市	千代田（八木原）貝塚
6	久喜市	29	宇都宮市	刈沼遺跡	53	佐倉市	宮内井戸作遺跡
7	白岡市	茨城県			54	佐倉市	天神前遺跡
8	蓮田市	30	猿島郡五霞町	冬木貝塚	55	山武横芝光町	山武姥山貝塚
9	蓮田市	31	猿島郡境町	本田遺跡	56	匝瑳市	久方貝塚
10	白岡市	32	つくばみらい市	前田村遺跡	57	匝瑳市	多古田遺跡
11	さいたま市	33	常総市	築地遺跡	58	銚子市	余山貝塚
12	さいたま市	34	つくば市	上境旭台貝塚	59	千葉市	六通貝塚
13	さいたま市	35	土浦市	神立平遺跡	60	千葉市	築地台遺跡
14	さいたま市	36	稲敷郡美浦村	法堂遺跡	61	千葉市	加曾利貝塚
15	さいたま市	37	稲敷市	広畑貝塚	62	千葉市	矢作貝塚
16	さいたま市	38	つくば市	小山台貝塚	63	大網白里市	養安寺遺跡
17	さいたま市	39	取手市	中妻貝塚	64	茂原市	下太田貝塚
		千葉県			65	市原市	菊間手永遺跡
18	さいたま市	40	野田市	野田貝塚	66	市原市	能満上小貝塚
19	さいたま市	41	我孫子市	下ヶ戸貝塚	67	市原市	西広貝塚
20	川口市	42	松戸市	貝の花貝塚	68	袖ヶ浦市	山野貝塚
21	川口市	43	松戸市	上本郷貝塚	69	袖ヶ浦市	上宮田台貝塚
22	川口市	44	市川市	堀之内貝塚	70	君津市	三直貝塚
23	川口市	45	市川市	道免き谷津遺跡	71	富津市	富士見台遺跡
24	新座市	46	印西市	馬場遺跡第5地点			

(鈴木 1964b、図 5) に基づいて姥山式を型式と捉えている (鈴木 1964a)。セット論とは、文様・器形の組合せと器形のセットに注目し、一つの型式を文様や器形の特定の組合せと捉えた土器型式の認定方法の一つである。鈴木は、各地域や個々の遺跡でセットを成す器種構成や器種ごとの割合に特徴があることを指摘し、文様の差異ではなくセットの諸相によって地域性を捉えることにより、地域ごとの生活基盤や遺跡の具体的な性格をより反映しやすくなると考えた。

セット論は、鈴木が本来意図していた意味合いでの型式の認定方法としては積極的に利用されていないものの、セットとして型式を捉えることは、型式内容の特徴を把握するためには有効であると言える。なおかつ、鈴木が示した姥山式の内容は、姥山Ⅲ式の問題を除いて大きな問題が指摘されたことはなく、型式としての特徴を的確に捉えていると言える。しかし一方で、安行 3b 式と少なからず文様や器種を共有している点から、姥山式をあくまで安行 3b 式の地域性と捉えるべきとする意見も根強かった (鈴木・鈴木 1982)。

4-1-2. 佐藤達夫の異系統土器論

明確な型式として分離することには疑問が残る一



- 器形 A・B・Dは、器形セットの中核をなす。
- 文様 A・B・C・D・Eは、ある一つの文様表出技法によって表現される文様。
- 文様 Hは、これと又異った文様表出技法による文様。

図 5 鈴木公雄のセット論概念図

方、単なる安行 3b 式の地域性と片付けるには特徴的すぎる姥山式について、本稿では佐藤達夫の異系統土器論 (佐藤 1974) を参考とすることにした。

土器型式の概念を体系付けた山内清男は、ある型式圏に混在する異系統の存在を移入と模倣と捉えて説

明した(山内 1930・1936)。しかし佐藤達夫は、一型式内に複数系統の土器が共存しており、移入と模倣だけでは説明が難しい場合が多々あると考え、系統を型式として捉える「異系統土器論」を展開した(佐藤 1974、図6)。

異系統土器論の大きな特徴は、共存する異系統を同等に扱う点である。佐藤は、異系統土器の同時共存のパターンとして、①一遺跡に複数の型式(系統)が共存する場合、②一個体の土器に複数系統の文様が施される場合の二つを挙げた。これらは、移入や模倣による少量の異系統土器の混在や文様要素の混在ではなく、遺跡内での主たる土器系統や土器一個体の明確な母体を見出すことが難しい場合が想定されている。この場合、主系統の土器に一部異系統が混在したというよりは、系統を異にする複数型式の特殊な組合せと捉える方が実態をより適切に説明できると佐藤は考えた。

大塚達朗は、佐藤の型式の捉え方を山内と比較して「同処性」という言葉で表現した(大塚 2000)。一地域に一型式という山内の「年代学的な単位」(山内 1932)としての捉え方が型式の異処性を前提にしているのに対し、異系統土器論では、複数の同等な型式

(系統)が共存し、組み合わせあって同時期同処の土器群を構成し、次型式を生成すると大塚は論じている。

複数系統を対等に評価した佐藤の異系統土器論は、まさに安行 3b 式と姥山式の在り方を示しており、型式か否かという姥山式の持つ本質的な課題を解決する。よって本稿では、異系統土器論をもとに姥山式を系統としての型式と捉えることにする。

#### 4-2. 姥山Ⅲ式の問題

研究史で最も大きな課題となっていた姥山Ⅱ・Ⅲ式の問題について、本稿での捉え方を述べる。まず、鈴木公雄が指摘した縄文の有無による区分(鈴木 1963)は、縄文の有無が時期差であるのか否かを層位的に証明するのは現段階では非常に難しい。先行研究では、大波状口縁深鉢形土器の文様分析から、縄文の有無に関わらず同様の変遷過程がみられるという指摘がなされている(福田 2006)。姥山式に特徴的な文様のほとんどは、同時期のバリエーションであると筆者は考えているが、福田が最終段階に定めた扁平な逆S字文に関しては、後出の要素であるとする点に賛同している。これは、筆者が文様と器形の点から姥山式の後半期に位置づけた「くびれ消失型」(図9-4)

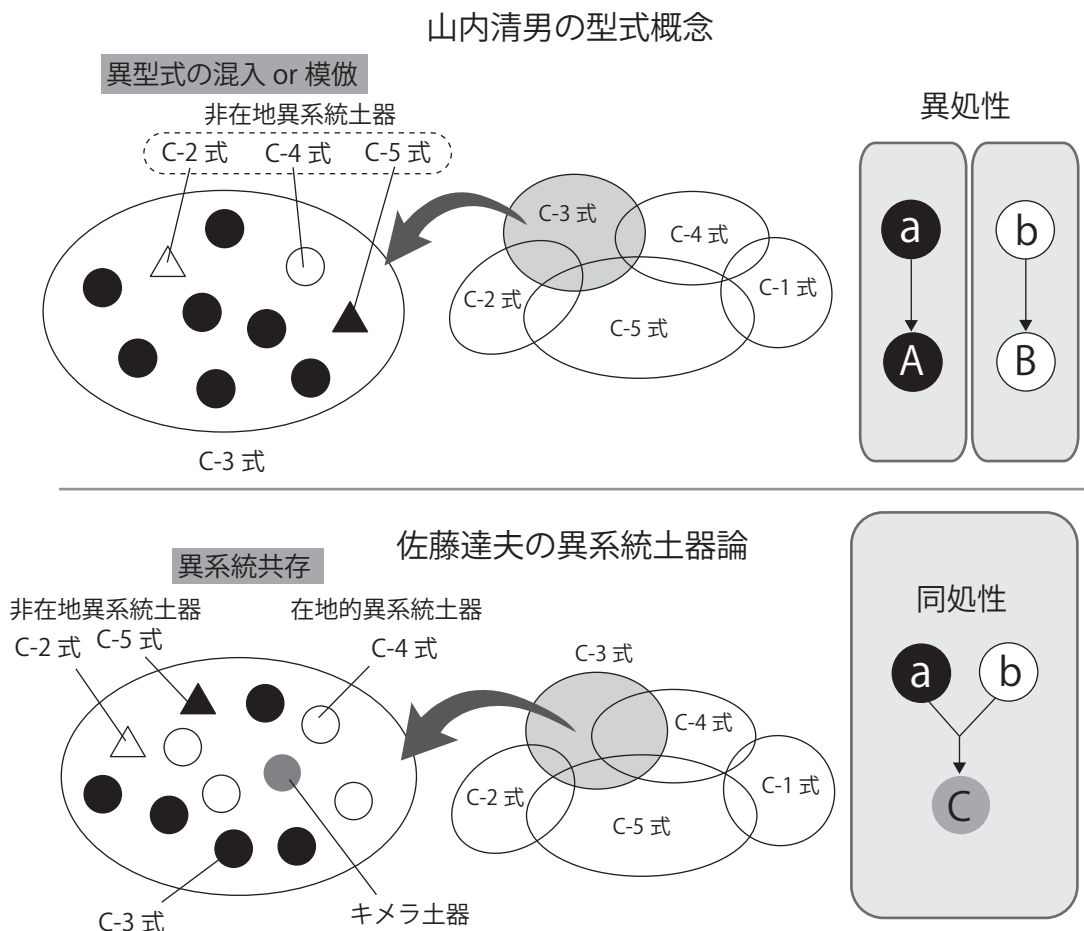
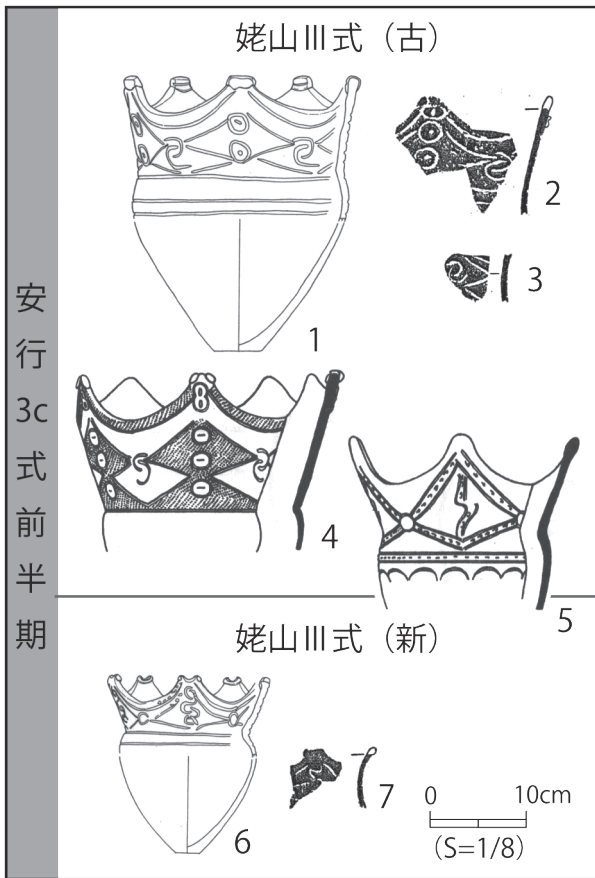


図6 佐藤達夫の異系統土器論概念図





高井東遺跡 (1・6) 裏慈恩寺遺跡 (2・3・7)  
奈良瀬戸遺跡 (4・5)

図7 安行 3c 式に併行するとされた姥山式

の土器群に相当するもので、特徴については後述の型式内容および分析対象の特徴を参照頂きたい。これら「くびれ消失型」の多くの個体に縄文が施文されている点から、縄文の有無が明らかな時期差を示しているとは考えがたいと結論づけた。よって本稿では、縄文の有無による区分は行わないこととする。

次に、安行 3c 式期に一部併行することが指摘された姥山式の扱いについて述べる。鈴木加津子は、姥山Ⅱ式が安行 3b 式から安行 3c 式期にわたっていることを指摘した上で (鈴木加 1981)、姥山Ⅲ式が後出であるという時間差を認めた (鈴木・鈴木 1983、図7)。

安行 3b—姥山Ⅱ (古)

安行 3c—裏慈恩寺 1—姥山Ⅱ (新)・姥山Ⅲ (古)

安行 3c—裏慈恩寺 2—続姥山Ⅱ・姥山Ⅲ (新)

特に注目すべき点は、鈴木らが姥山Ⅲ式とした土器群には、列点文や弧線文など安行 3c 式に特徴的な要素が多分に見受けられる点である。本稿では詳しく触れていないが、筆者は安行 3c 式期にみられる姥山式を母体とした土器群を、姥山式の影響によって成立した安行 3c 式の重要な系譜の一つと捉えており、それらは飽くまで安行 3c 式の範囲で捉えるべきであると考える。そこで、姥山Ⅲ式にかわって別の括りを設定

することにしたい。この土器群の定義や特徴については、別稿を予定している。

よって本稿では、姥山Ⅱ式とⅢ式の区分はせず、両者を合わせて姥山式と呼称する。鈴木公雄が提示した姥山Ⅱ式の型式内容を確認する場合のみ、姥山Ⅱ式の呼称を使用する。

#### 4-3. 姥山式の型式内容

鈴木公雄は、姥山Ⅱ式を a~h 類に分類した (鈴木 1964a、図2)。鈴木が提示した姥山Ⅱ式の特徴や型式内容は、出土量が急増した現在でも大きな齟齬はない。そこで筆者は、鈴木のカテゴリをもとに型式内容の再整理を行った。器形を軸として大別し直し、分類の内容自体は鈴木のものにほぼ依拠した。その上で、新たに増加した資料の集成結果にもとづき、分類の細分や特徴がよりわかりやすい資料の提示を試みた。

前述した通り、姥山式は良好な一括資料が確認できておらず、層位的な裏付けを持った型式認定は困難である。そこで、姥山式の資料が比較的まとまって出土している千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡 118 号住居跡と千葉県印西市馬場遺跡第 5 地点 241 号土坑出土資料を用いることで、資料の抽出にできる限りの配慮をした。ただし、どちらも複数型式にわたって多量の土器が出土している特殊な遺構であり、依然として層位的な問題を解決できていない点に留意しなければならない。また、大波状口縁深鉢形土器と細密沈線文の施された土器は、特徴をよりわかりやすく示している資料を抽出した。本稿における大波状口縁深鉢形土器の部位呼称を図8に、型式分類は図9に示した。

##### (1) 深鉢形土器

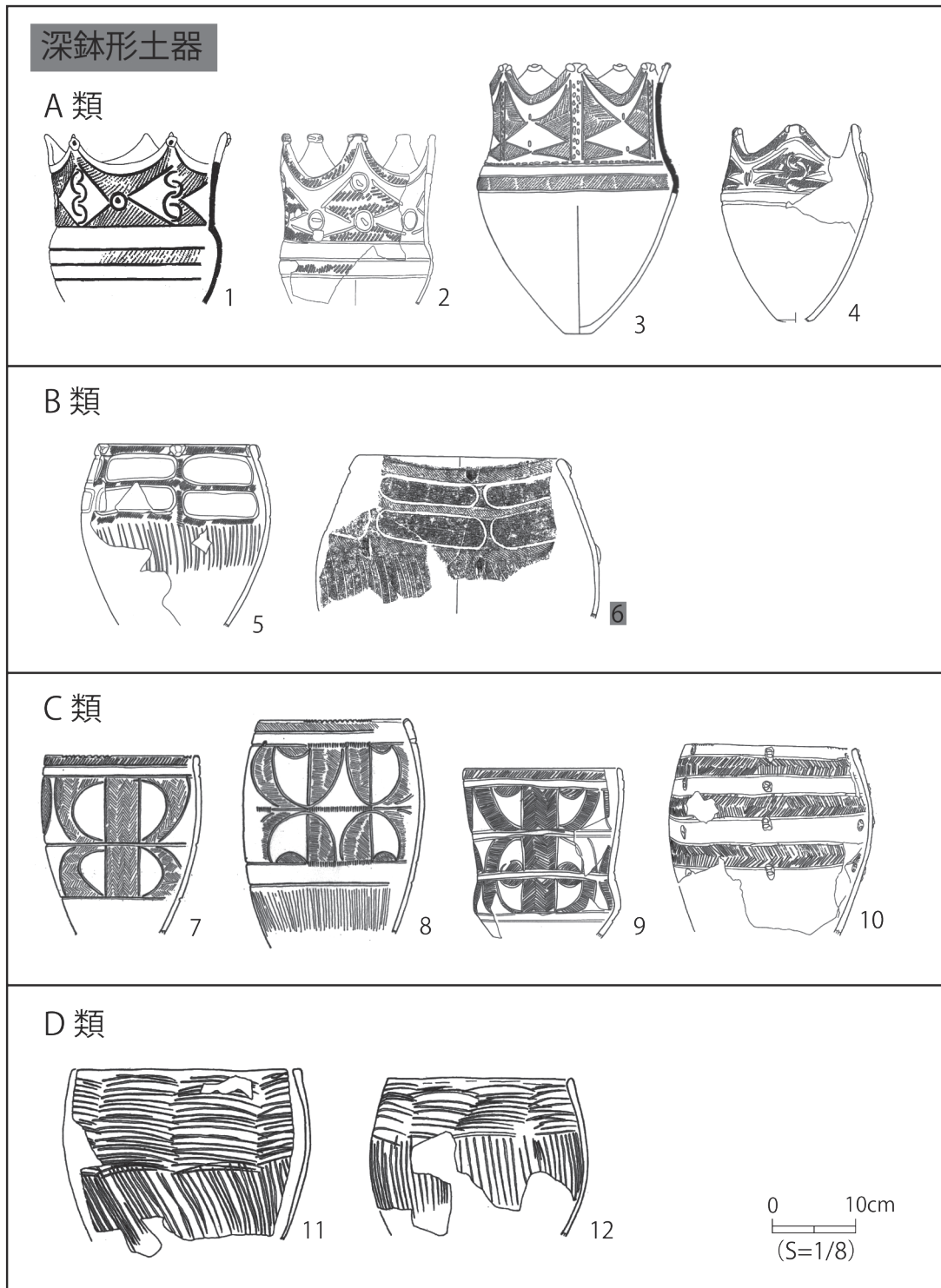
A 類：大波状口縁深鉢形土器

4 ないし 5 単位の大波状口縁深鉢形土器。口頸部の主要な文様は、入組弧線文、円圈文<sup>1)</sup>、並行沈線縦位区画文である。各波頂部に鉢巻き状の貼付文が施文される場合が多い。胴部は「く」の字状に強く屈曲し、口頸部が外反する。胴部には縄文帯を有するものが多い。姥山式の後半期には、図9-4のような胴部のくびれと縄文帯が消失し、口頸部に扁平な逆 S 字文を有するものが出現する。

B 類：杵状文を有する平口縁深鉢形土器

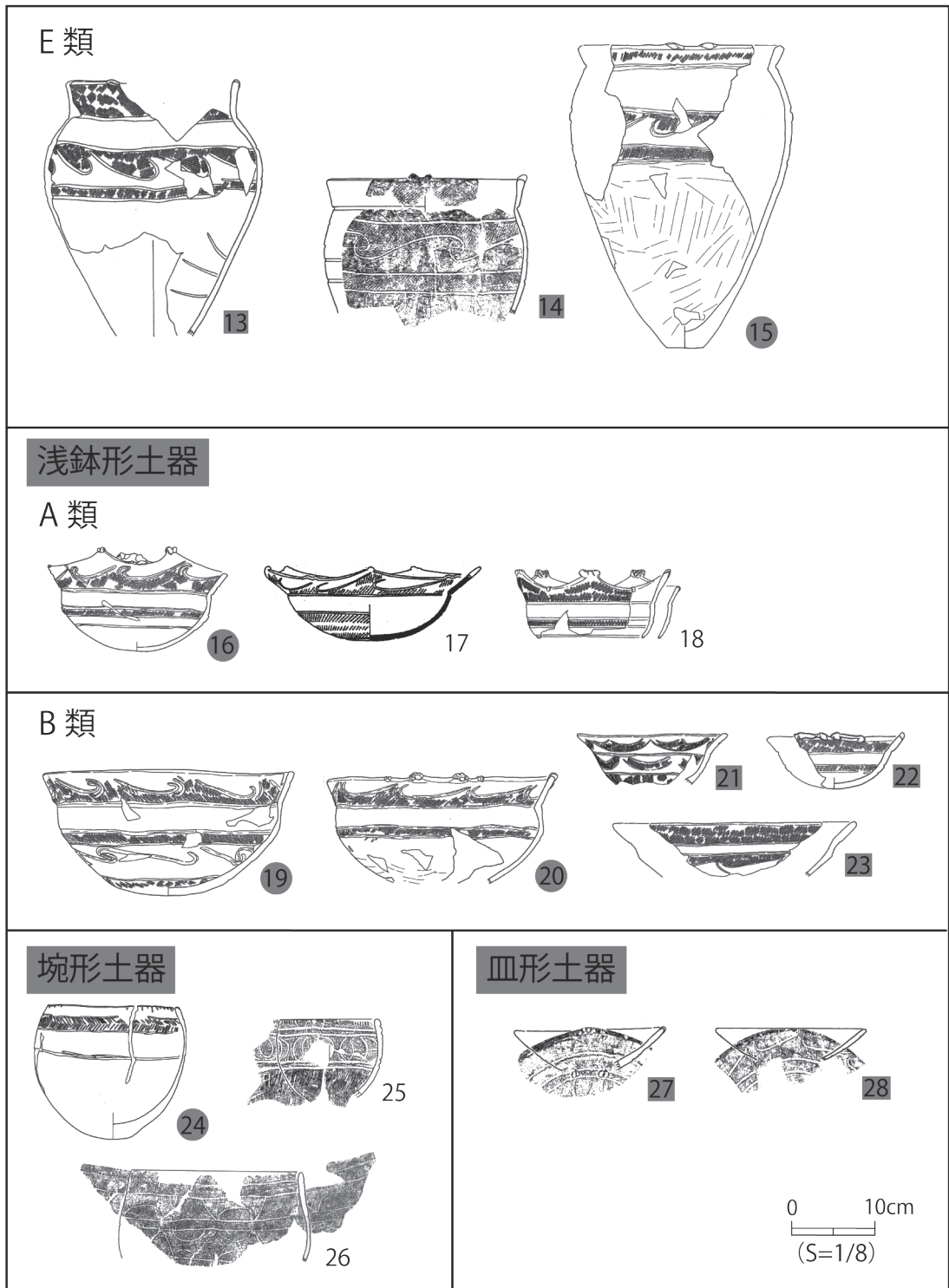


図8 大波状口縁深鉢形土器の部位呼称



茨城県域：築地遺跡 (1) 上境旭台貝塚 (25) 千葉県域：加曾利貝塚 (2・18・26) 多古田遺跡 (3) 上宮田台貝塚 (4) 道免き谷津遺跡 (5・9) 宮内井戸作遺跡 (6・13・14・21~23・27・28) 貝の花貝塚 (7・8) 六通貝塚 (10) 下ヶ戸貝塚 (11・12)

図9-① 姥山式の分類



馬場遺跡第 5 地点 (15・16・19・20・24) 久方貝塚 (17)

■：宮内井戸作遺跡 118 号住居跡出土資料

●：馬場遺跡第 5 地点 241 号土坑出土資料

図 9-② 姥山式の分類

口縁部が内湾する。二段の杵状文を有し、胴部下半には条線が施文される場合が多い。円形の貼付文が施文される場合もある。

C 類：細密沈線文を有する平口縁深鉢形土器

口縁部が内湾する器形もしくは、胴部に緩やかにくびれを有する器形。口唇部に刻み目が施される。直線と曲線による幾何学文、または、矢羽根状の沈線文が施文される。

D 類：条線のみを有する粗製土器

胴部上半に横位の条線、胴部下半に斜方向の条線が施文される。

E 類：口縁部が屈曲して外反した、広口壺に類似する平口縁深鉢形土器

外反する口縁部に縄文が施文され、胴部には横位の J 字文や横位の連続 S 字文が施文される場合が多い。

#### (2) 浅鉢形土器

A 類：口縁部が屈曲して外反した波状口縁浅鉢形土器

4 ないし 5 単位の波状口縁浅鉢形土器。外反した口縁部に縄文や J 字文が施文される。胴部には沈線が横走り、縄文帯が施文される。波頂部に鉢巻き状の貼付文が施文される場合もある。

B 類：口縁部が屈曲して外反した平口縁浅鉢形土器

文様は A 類と同様。加えて、図 9-21 のような重弧線文も施文される。

#### (3) 細密沈線文を有する埴形土器

口縁部が内湾する器形とやや外反する器形がある。文様は深鉢形土器 C 類同様に、幾何学文や矢羽根状の沈線文が施文される。

#### (4) 皿形土器

並行沈線や J 字文などが施文される。無文のものもある。

姥山式の大きな特徴は、安行 3a 式や 3b 式に特徴的な三叉文、三叉状入組文が欠如している点である。東北地方の影響と考えられる三叉文が欠如する点は、姥山式が関東東部地域独自の地域色を強めていることを示している。特筆すべき文様としては、鈴木公雄が「稻妻状磨消文」（鈴木 1964a）と呼称した、大波状口縁深鉢形土器にみられる菱形状の文様区画が第一に挙げられる。幾何学的な細密沈線文、浅鉢形土器や口縁部が屈曲した深鉢形土器（深鉢形土器 E 類）にみられる横位の J 字文や S 字文も姥山式に特徴的な文様と言える。文様は、縄文時代後晩期の土器に顕著な磨消縄文手法と沈線によって描出されている。

また、条線のみを有する粗製土器は、安行式に伝統的な紐線文の系譜を継ぐ粗製土器と分布圏が明確に分かれており、姥山式に特徴的な粗製土器であると考えられる（図 12）。器種は上記以外に、注口土器や台付き土器なども少量存在すると考えられる。

## 5. 大波状口縁深鉢形土器の分布分析

### 5-1. 分析対象の特徴

#### 5-1-1. 姥山式大波状口縁深鉢形土器

姥山式大波状口縁深鉢形土器の特徴は、深鉢形土器 A 類として述べた通りである。姥山式期を通じてみられる口頸部の主要な文様としては、入組弧線文、円圏文、並行沈線縦位区画文の 3 種類が挙げられる（図 9-1・2・3）。これらは一個体中に組み合わせられている場合が多く、同時期の文様バリエーションであると考えられる。

姥山式の後半期になると、口頸部に扁平な逆 S 字文を有し、胴部のくびれと縄文帯を消失したタイプが出現する（図 9-4）。出土量はそれほど多くなく、器形と文様両方の観点から姥山式につづく前浦式への変遷過程を示すものであると考えられ、姥山式期の中でも後出の要素であることは間違いない。この変遷過程は、先行研究ですでに指摘されている（宮田 1990、福田 2006、松丸 2012）。より詳細な変遷過程は、別稿を予定している。

#### 5-1-2. 安行 3b 式大波状口縁深鉢形土器

器形は、安行式に伝統的な胴部にくびれを有するものが引き継がれ、寸胴化する（図 10）。一方、安行 2 式期から存在するくびれを有さない砲弾状の器形の増加も目立つ。砲弾状の器形は安行 2 式期に新しく出現したもので、異系統である姥山式の成立にも関与していると考えられる。この器形はその後、安行 3c 式期に「小深作系列」（鈴木・鈴木 1982）としてわずかに存続しつつも消失の一途をたどる。くびれを有する器形は、安行 3c 式以降も主要な器形として存続する。

文様構成は、安行 3a 式からの伝統を引き継ぎ、よ

寿能泥炭層遺跡

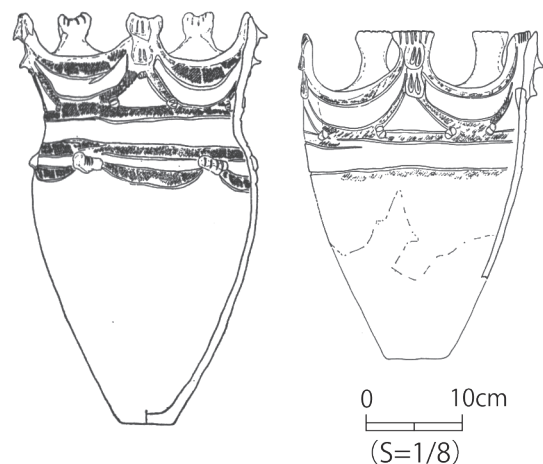


図 10 安行 3b 式大波状口縁深鉢形土器

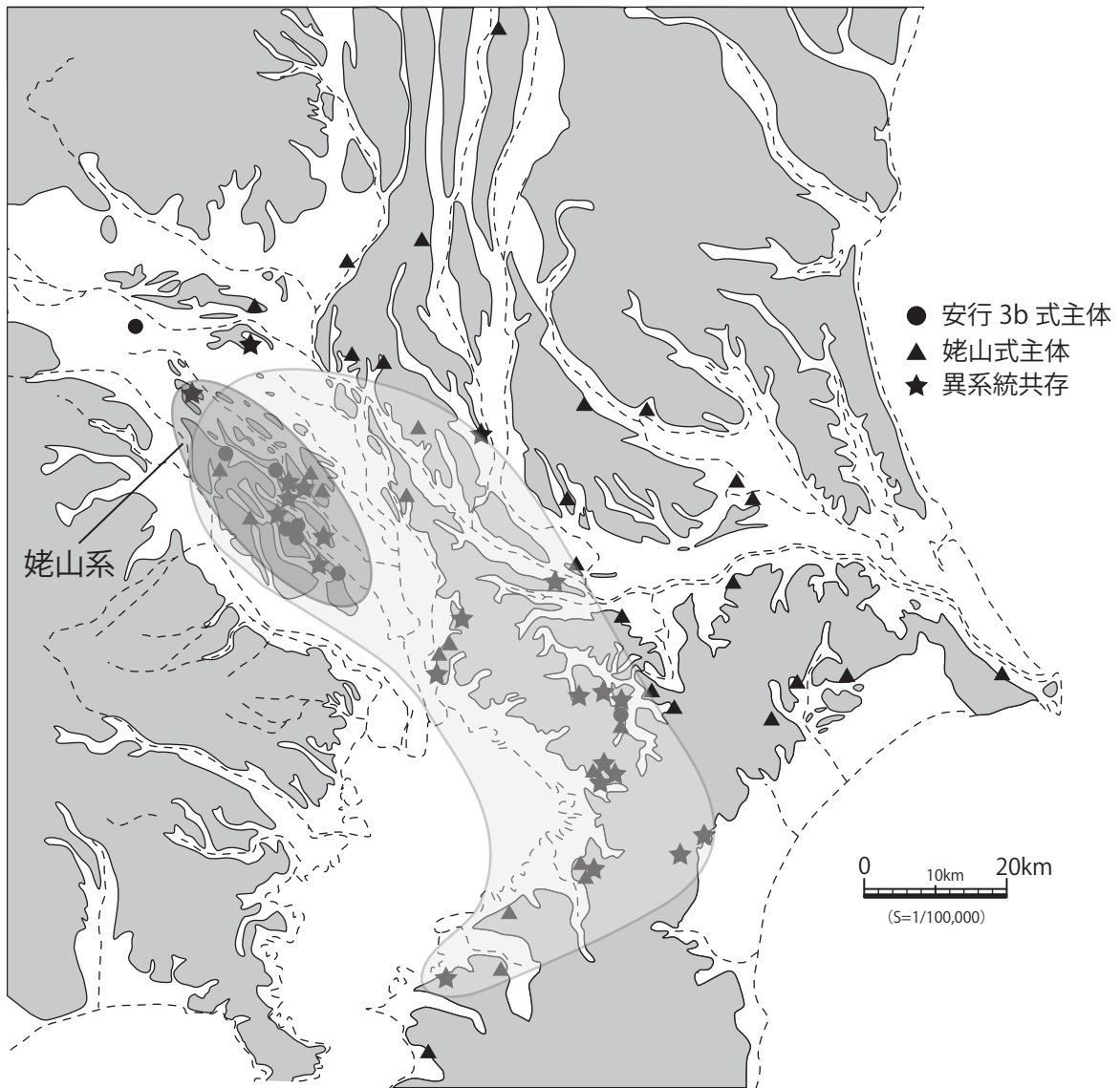


図 11 大波状口縁深鉢形土器の分布図

り簡略化したものとなる。口頸部に施文される文様の多くは、口縁部の縄文帯と文様帯下部の縄文帯、その間に垂下した弧線の縄文帯が施されるのみである。波頂部形態は、安行 3a 式の扁平化した鱗形と同様である。安行 3b 式に最も特徴的な文様は、波頂部下の縦位に二つ並んだ豚鼻状の貼付文である。この貼付文は縦長で、断面形の下部が尖っているものが多い。この特徴的な貼付文は、かなり限定された時期の意匠であることが指摘されている（新屋 1992）。胴部には、縄文帯が施されるものがある一方、口頸部の文様帯に無文帯を付け加えるかのように、沈線を一本のみ描出するものや、沈線下に一部縄文を施すもの等が確認できる。

### 5-2. 遺跡ごとの出土状況

各遺跡の土器出土状況を表 3 に、分布図を図 11 に示した。大波状口縁深鉢形土器は、内房地域、印旛沼

周辺地域から東葛地域、大宮台地にかけて広範囲で異系統土器が混在していることが確認できる。一方、茨城県の大部分と千葉県北東部など関東東部地域においては、姥山式が主体で安行 3b 式がほとんど出土しない遺跡が分布している。出土量では、千葉県域では姥山式が、大宮台地では安行 3b 式が優位であるというように出土傾向は地域ごとに異なるものの、姥山式が関東西部地域まで広く分布している様子がうかがえる。ただし、大宮台地で出土する姥山式に類似する土器群は、先行研究にて「姥山系」大波状口縁深鉢形土器と捉えられている（新屋 1992、奥野 1998 など）。姥山式の分布状況を正しく把握するためには、「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の実態を明らかにすることが不可欠である。

比較のため、安行 3b 式期の粗製土器と晩期中葉の土器群の分布を示した（図 12・13）。粗製土器は、異系統が共存している範囲が非常に狭く、安行 3b 式

表 3-① 分析対象土器の遺跡ごとの出土状況

	都道府県	遺跡名	大波状口縁深鉢		細密 沈線文	粗製土器		安行 3c・d	前浦 I・II
			安行3b	姥山		紐線系	条線系		
1	埼玉県	諏訪木遺跡	○		○	○		○	
2	埼玉県	赤城遺跡	○	○	○	○		○	
3	埼玉県	長竹遺跡	○	○	○	○			
4	埼玉県	後谷遺跡	○			○		○	
5	埼玉県	高井東遺跡		○	○	○		○	
6	埼玉県	小林八束遺跡	○	少量	○	○		○	
7	埼玉県	入耕地遺跡	○	○	○	○		○	
8	埼玉県	久台（ささらⅡ）遺跡	○	○	○	○		○	少量
9	埼玉県	雅楽谷遺跡	○	○	○	○		○	
10	埼玉県	前田遺跡		○	○	○		○	○
11	埼玉県	裏慈恩寺遺跡		○	○	○		○	
12	埼玉県	奈良瀬戸遺跡	少量	○	○	○		○	
13	埼玉県	東北原遺跡	○	○	○	○		○	
14	埼玉県	寿能泥炭層遺跡	○			○		○	
15	埼玉県	小深作遺跡	○		○			○	
16	埼玉県	前窪遺跡	○	少量	○	○		○	
17	埼玉県	真福寺泥炭層遺跡		少量	○	○		○	
18	埼玉県	黒谷田端前遺跡	少量	少量	○	○		○	少量
19	埼玉県	馬場小室山遺跡	◎	○	○	○		○	
20	埼玉県	赤山遺跡	◎	○		○		○	
21	埼玉県	上台（精進場）遺跡	○	少量	○	○		○	
22	埼玉県	宮合貝塚遺跡		少量	○	○		○	
23	埼玉県	石神貝塚				○		○	
24	埼玉県	鑑田遺跡				○		○	
25	埼玉県	中橋場遺跡	少量	少量		○		○	
26	群馬県	板倉遺跡		○	○		○	○	
27	栃木県	乙女不動原北浦遺跡		○	○	○	少量	○	○
28	栃木県	寺野東遺跡	少量	○	◎	○		少量	○
29	栃木県	刈沼遺跡		○	○			東北系	
30	茨城県	冬木貝塚		○	○		○	◎	○
31	茨城県	本田遺跡		○		○		◎	○
32	茨城県	前田村遺跡		○	○		○		
33	茨城県	築地遺跡	○	◎	◎		○	◎	○
34	茨城県	上境旭台貝塚		○	◎		○		○
35	茨城県	神立平遺跡		○	○		○	少量	○
36	茨城県	法堂遺跡		○	○		○	少量	少量
37	茨城県	広畑貝塚	3a末か	○	◎		○		少量
38	茨城県	小山台貝塚		○				○	○
39	茨城県	中妻貝塚	3a末か	○	○				

表 3-② 分析対象土器の遺跡ごとの出土状況

	都道府県	遺跡名	大波状口縁深鉢		細密沈線文	粗製土器		安行 3c・d	前浦 I・II
			安行3b	姥山		紐線系	条線系		
40	千葉県	野田貝塚		○		○		○	○
41	千葉県	下ヶ戸貝塚	○	○	◎	少量	○	○	◎
42	千葉県	貝の花貝塚	○	○	◎	○	◎	◎	○
43	千葉県	上本郷貝塚	少量	○	○	少量	○	◎	○
44	千葉県	堀之内貝塚		○	○	少量	○	○	○
45	千葉県	道免き谷津遺跡	◎	○	◎	◎	○	◎	○
46	千葉県	馬場遺跡第5地点	少量	○	○		○	少量	○
47	千葉県	公津原遺跡	少量	○					○
48	千葉県	内野第一遺跡	○	○	○		○		○
49	千葉県	井野長割遺跡	○	○	◎	少量	○	○	◎
50	千葉県	吉見台貝塚	○	○	○		○	○	◎
51	千葉県	嶋越遺跡	○	少量	○	○		○	少量
52	千葉県	千代田（八木原）貝塚		○	○		○		○
53	千葉県	宮内井戸作遺跡	3a末か	○	○		○	少量	○
54	千葉県	天神前遺跡		○	○		○		○
55	千葉県	山武姥山貝塚		○	○		○		○
56	千葉県	久方貝塚	少量	○	○		○		○
57	千葉県	多古田遺跡		○			○		○
58	千葉県	余山貝塚		○	○		○		○
59	千葉県	六通貝塚	○	◎	◎		○	少量	○
60	千葉県	築地台遺跡	少量	○				少量	○
61	千葉県	加曾利貝塚	○	◎	◎		○	少量	
62	千葉県	矢作貝塚	○	◎	○				○
63	千葉県	養安寺遺跡	○	◎	○	少量	○	少量	○
64	千葉県	下太田貝塚	○	◎	◎	少量	○	少量	○
65	千葉県	菊間手永遺跡		○	○	少量	○	○	◎
66	千葉県	能満上小貝塚	○	○	○		○	少量	○
67	千葉県	西広貝塚	少量	○	○		○	○	◎
68	千葉県	山野貝塚	少量	○	○		○		
69	千葉県	上宮田台貝塚	少量	○	○	少量	○	○	◎
70	千葉県	三直貝塚	○	◎	◎		○	○	◎
71	千葉県	富士見台遺跡		○	○		○		○

※◎は特に多量出土

と姥山式の系統差をより強調した分布と言える。晩期中葉の土器群は、安行 3b 式期より異系統共存の範囲が狭まっており、晩期中葉における東西関東の明確な型式差への帰着を示している<sup>2)</sup>。

### 5-3. 遺構ごとの出土状況

縄文時代晩期は住居数が激減している上、複数の土器型式が多量出土する大型住居など特殊な遺構が多い。このため、分析の遺構数や確度の限界を踏まえた上で可能な限りの分析を行った。大波状口縁深鉢形土器を中心に、遺構ごとの土器出土状況を表 4

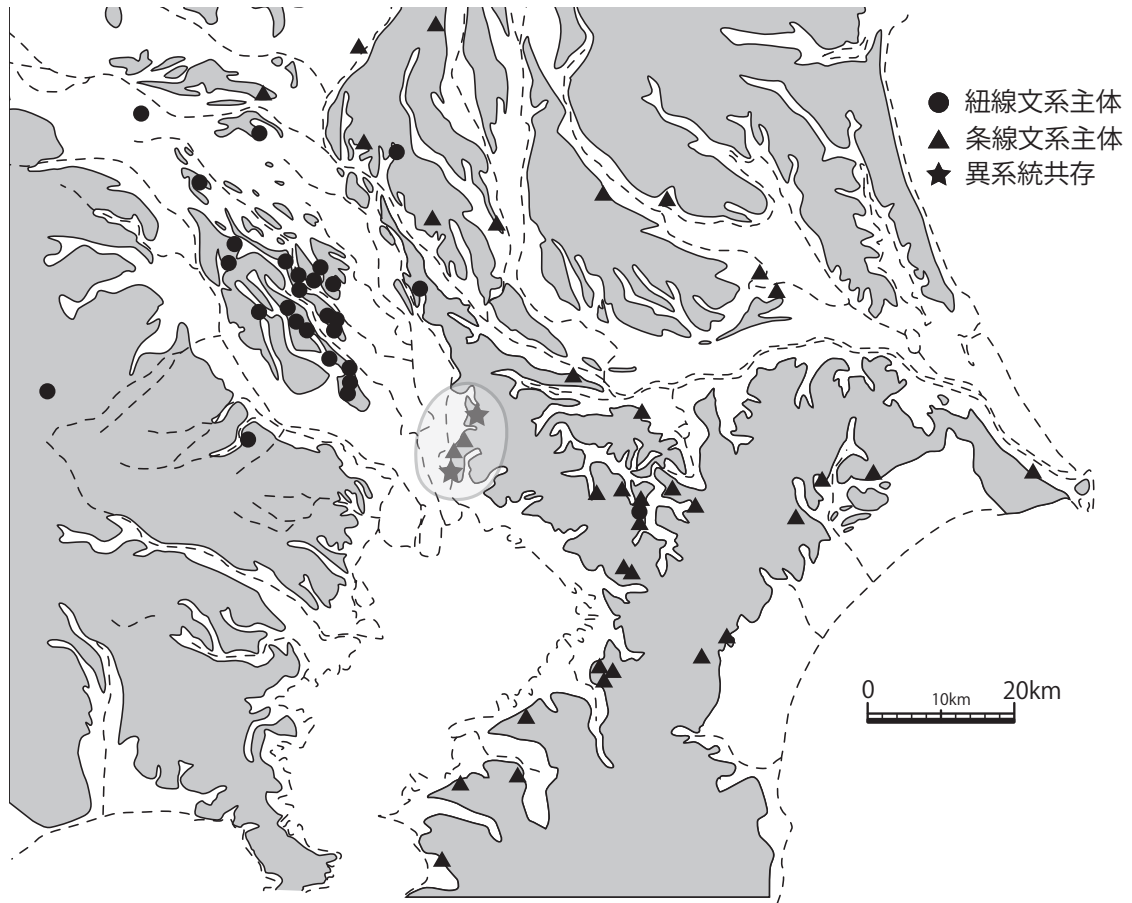


図 12 粗製土器の分布図

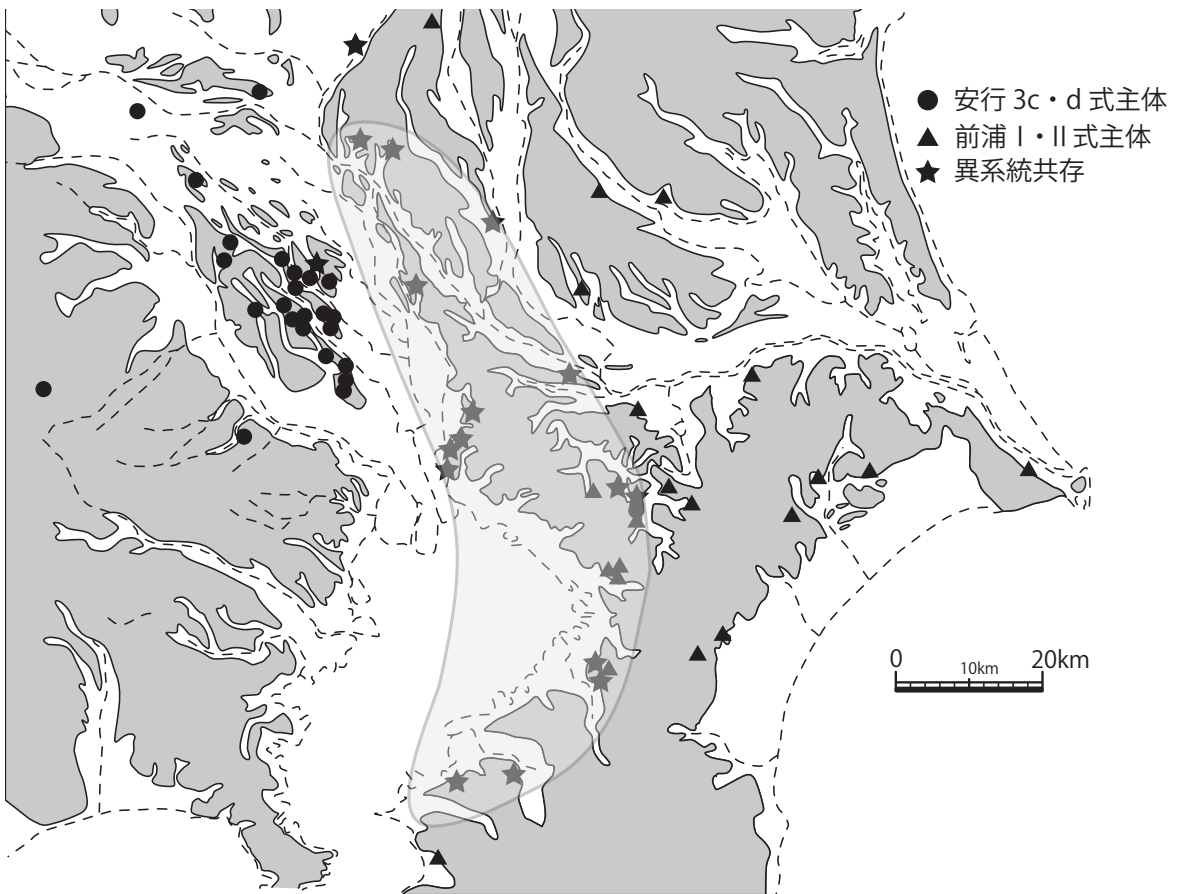


図 13 縄文時代晩期中葉土器群の分布図



表 4 安行 3b 式と姥山式の遺構ごとの出土状況

都道府県	遺跡名	遺構名	3b	姥山	都道府県	遺跡名	遺構名	3b	姥山
1 埼玉県	諏訪木遺跡	D区第1号竪穴住居跡	○		40 千葉県	野田貝塚	168号土坑		△
		D区第2号竪穴住居跡	○		41 千葉県		下ヶ戸貝塚	01C号住居	○
3 埼玉県	長竹遺跡	第36号土坑	○		04号住居	○		○	
		第249号土坑		○	05号住居	○		○	
		第533号土坑	○		06A号住居	△		○	
		第544号土坑		○	07A号住居	◎		○	
		第586号土坑		○	11号住居			○	
5 埼玉県	高井東遺跡	第8A・B号住居址		○	14号住居	◎			
8 埼玉県	久台(ささらII)遺跡	第5号住居跡		○	42 千葉県	貝の花貝塚		12号住居	
13 埼玉県	東北原遺跡	第2号住居跡	○	○	46 千葉県	馬場遺跡 第5地点	11号住居		○
		第4号住居跡		○			14号住居		○
19 埼玉県	馬場小室山遺跡	第2a号住居		○			48 千葉県	内野第一遺跡	J-20号住居跡
第3号住居		△		D-49号土坑		○			
第6号住居		○		53 千葉県	宮内井戸作遺跡	II地区63号A住居		○	
第10a号住居		○				II地区118号住居	△	○	
第1号土坑		○				III-3地区10号住居		○	
30 茨城県	冬木貝塚	SI01		○	III-3地区15号住居		○		
32 茨城県	前田村遺跡	第464A・B号住居跡	△	△	60 千葉県	築地台貝塚	3号住居		○
33 茨城県	築地遺跡	第4・55号竪穴建物	△	○	63 千葉県	養安寺遺跡	SI026	○	
		第11号竪穴建物		○			SI089A		○
		第22号竪穴建物	○		69 千葉県	上宮田台貝塚	SI046住居跡		○
		第23号竪穴建物		○			SI214住居跡		○
		第35号竪穴建物	△				SK082土坑		○
		第28号土坑		○			SK084土坑		○
		第34号土坑	○				SK087土坑		○
第179号土坑		○	70 千葉県	三直貝塚	SI-007		○		
34 茨城県	上境旭台貝塚	第15号竪穴建物跡			○	SI-009		○	
35 茨城県	神立平遺跡	住居跡SI03			○	SI-010		○	
		住居跡SI27			○	SI-012		○	
						SI-019		○	
						SI-021		○	
						SI-027		○	
						SI-029	△	△	
						SI-033		○	
						SK-042		○	

※◎は特に多量出土。△は確定的ではないが可能性があるもの。

に示した。

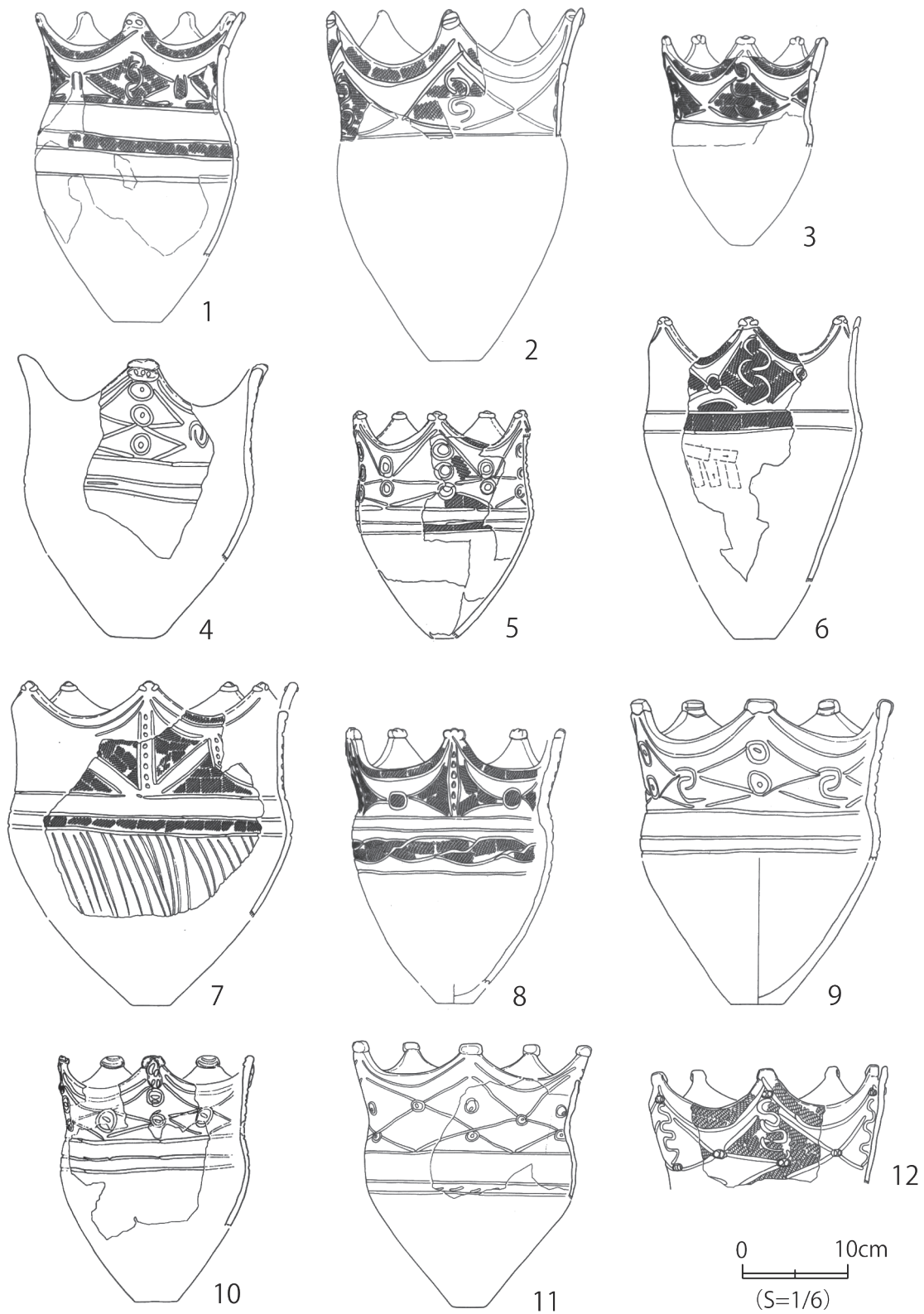
分析の結果、安行 3b 式と姥山式が同一遺構内で同程度出土する事例は非常に少ないことがわかった。同一遺構からの出土が確認できたのは、埼玉県さいたま市東北原遺跡第 2 号住居跡、千葉県我孫子市下ヶ戸貝塚 04 号、05 号、07 号住居の 4 例のみである。東北原遺跡第 2 号住居跡と下ヶ戸貝塚 07 号住居は安行 3a ~ 3b 式にかけての住居であるが、下ヶ戸貝塚 04、05 号住居は晩期安行式ほぼ全ての時期を通じて土器が多量出土している大型住居である。こういった出土状況を考慮すると、安行 3b 式と姥山式が遺構レベルで共存していると言える事例は限りなく少ない。

#### 5-4. 分布状況の考察

遺跡、遺構ともに出土状況は、異系統が少量混在したのではなく、両者が同等に存在していたことを示している。その上で、遺跡での出土状況を見ると

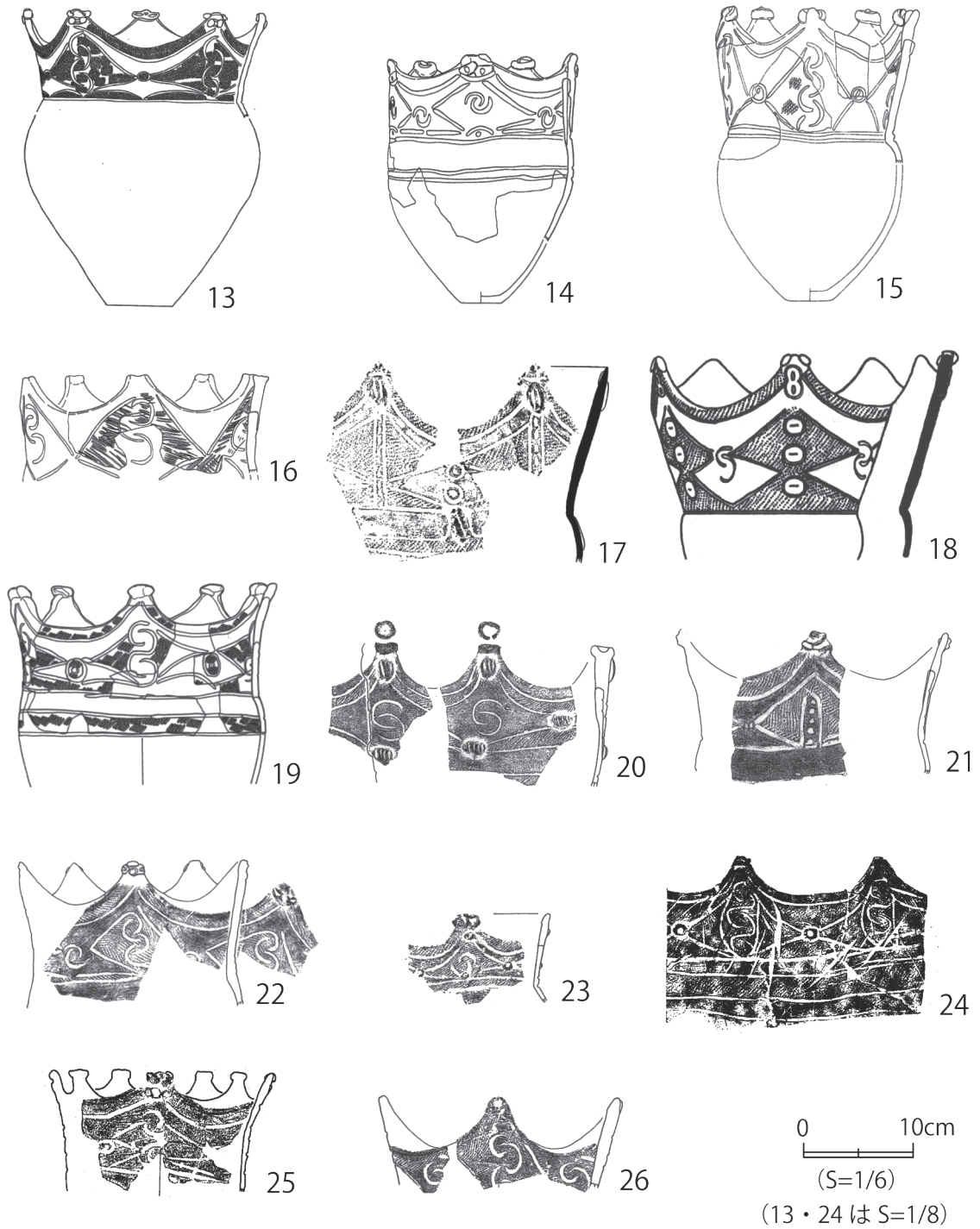
かなり広範囲の遺跡で異系統の共存が確認できる一方、遺構単位での共存例は非常に少ないことがわかった。個々の事例をみると、さらに興味深い点がかがえる。例えば、千葉県我孫子市下ヶ戸貝塚や茨城県常総市築地遺跡では、安行 3b 式主体の遺構と姥山式主体の遺構がそれぞれ複数存在している。また、安行 3b 式が明らかに多量出土している大宮台地においても、姥山式主体の遺構が少なからず存在している一方、安行 3b 式の出土が多量確認できた千葉県君津市三直貝塚では、安行 3b 式主体の遺構は確認されていない。

異系統土器が遺跡レベルでは広範囲で共存しているながら、遺構レベルではむしろ混在していない点の背景については、地域差であるのか遺跡内での集団差によるものなのか等、今後さらに検討していく必要がある。



赤城遺跡 (1~3) 長竹遺跡 (4~7) 高井東遺跡 (8・9) 雅楽谷遺跡 (10~12)

図 14-① 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器集成



黒谷田端前遺跡 (13) 久台遺跡 (14~16) 奈良瀬戸遺跡 (17・18) 赤山陣屋跡遺跡 (19) 東北原遺跡 (20・21) 馬場小室山遺跡 (22・23) 真福寺泥炭層遺跡 (24) 入耕地遺跡 (25) 前田遺跡 (26)

図 14 一② 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器集成

## 6. 大宮台地出土の「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の文様分析

姥山式の分布範囲や影響関係を正しく理解するために、大宮台地で出土する「姥山系」土器群の実態を明らかにする。「姥山系」と称される土器群は、細密沈線文土器なども含まれているが、ここでは大波状口縁深鉢形土器を対象に典型的な姥山式との共通点、相違点について詳細な観察をもとに分析を行う。

### 6-1. 「姥山系」土器群についての先行研究

「姥山系」土器群として取り上げられることが多いのは、安行式と姥山式の要素が混在したキメラ土器である。キメラ土器とは大塚達朗が提唱した概念で、複数系統の要素が混在した土器をさす（大塚 2000）。鈴木正博、鈴木加津子が「姥山Ⅱ式の西部関東に於ける系統が濃厚に認められる資料」として取り上げた埼玉県さいたま市黒谷田端前遺跡出土土器と桶川市高井東遺跡出土土器は、「姥山系」大波状口縁深鉢形土器に相当するものであることがわかる（図 3）。鈴木らは、姥山式の文様構成を基本としながらも、安行式に伝統的な磨消弧線文や入組文が施文されている点を指摘した。また、村田章人は、安行式と姥山式の折衷的な文様構成を有する土器群を「姥山Ⅱ式系土器（文様構成）」と捉えた（村田 2004）。出土例が非常に少ないことから、安行式が姥山式との関連の中で選択的に取り入れたものである可能性を指摘している。

「姥山系」土器群の特徴を具体的に指摘したのは、奥野麦生である。奥野は、①円文、蛇行沈線、コンパス文風の入組弧線などで文様帯の縦位分割を行うこと、②波頂下に構成される見かけの菱形区画等は単沈線によって描出されること、③菱形状の区画の交点に円文等の付加文を付すこと、④縄文施文部のネガ・ポジ逆転が容易に行われること、の 4 点を指摘した（奥野 1998）。さらに、「姥山系」土器群が安行 3c 式に大きな影響を与えた点を指摘している。また、新屋雅明は、安行 3b 式以降の主要な系列の一つとして、「姥山系波状口縁土器」を設定した（新屋 1992）。

このように、安行 3b 式を中心に出土する大宮台地における姥山式の影響力は、先行研究においても無視できないものであることが明らかであり、「姥山系」土器群は多くの場合、安行式と姥山式の要素が入り交じったものとして捉えられていることがわかる。

### 6-2. 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の文様分析

大宮台地出土の「姥山系」大波状口縁深鉢形土器を図 14 に集成した。残存状態の良いものを抽出し、文

様構成の詳細を分析する。

#### （1）赤城遺跡出土資料（図 14-1～3）

文様構成は姥山式とほとんど相違ない。1 は寸胴な器形で、波頂部貼付文が姥山式にはみられないやや特徴的な形状である。2 は S 字文が施文されている。3 は途切れ途切れの蛇行沈線が施文されているが、実測図に示されていない他の面には入組弧線文が確認できる（図 15）。3 の菱形区画の下部に相当する部分が一本の沈線による曲線で描出されている。

#### （2）長竹遺跡（図 14-4～7）

文様構成はほとんど姥山式であると言える。4・5 は姥山式との差異がほとんど確認できないが、5 の実測されていない破片資料を確認したところ、菱形区画がやや曲線的であることがわかった（図 15）。6 は寸胴な器形で、口頸部文様帯に弧線文を有している。胴部に文様を有さない。7 は平行沈線縦位区画文系の姥山式に類似しているが、単沈線ではなく伝統的な安行式の帯状区画で施文されている。鉢巻き状貼付文や胴部下の条線は姥山式的である。

#### （3）高井東遺跡（図 14-8・9）

8 は姥山式の文様構成に類似しているものの、特殊な波頂部形態や曲線区画を基調としている点、入組文の施文など、伝統的な安行式の影響を強く受けている。姥山式と安行式の要素が混在したキメラ土器であると言える。9 は姥山式とほとんど差異がないが、波頂部を覆い被せるような貼付文で、内側に沈線が施文されている。

#### （4）雅楽谷遺跡（図 14-10～12）

10 は実測図で口頸部の文様帯に円圏文が描かれているが、同一個体と考えられる他の破片資料では、入組文が施文されている（図 15）。波頂部には、内側に沈線を有する明確な鉢巻き状の貼付文が確認できる。波頂部下の貼付文が安行 3b 式的であるが、その他の文様構成は姥山式と相違ない。11・12 は、格子状沈線や蛇行沈線、菱形区画の乱れなど、姥山式文様構成の粗雑化、簡略化がみられる。

#### （5）黒谷田端前遺跡（図 14-13）

姥山式の文様構成を基本とするが、区画線が曲線的で、口頸部に弧線文を有する。

#### （6）久台遺跡（図 14-14～16）

姥山式の文様構成と大きな相違はない。14 は胴部のくびれが弱く、口頸部に弧線文を有する。15 は菱形区画の意識が希薄で、16 は文様の簡略化や安行 3c 式に類似した波頂部形態から、安行 3b 式終末期の様相がうかがえる。

#### （7）奈良瀬戸遺跡（図 14-17・18）

波頂部下の貼付文がやや安行 3b 式的である点以外は、ほとんど姥山式の文様構成と相違ない。

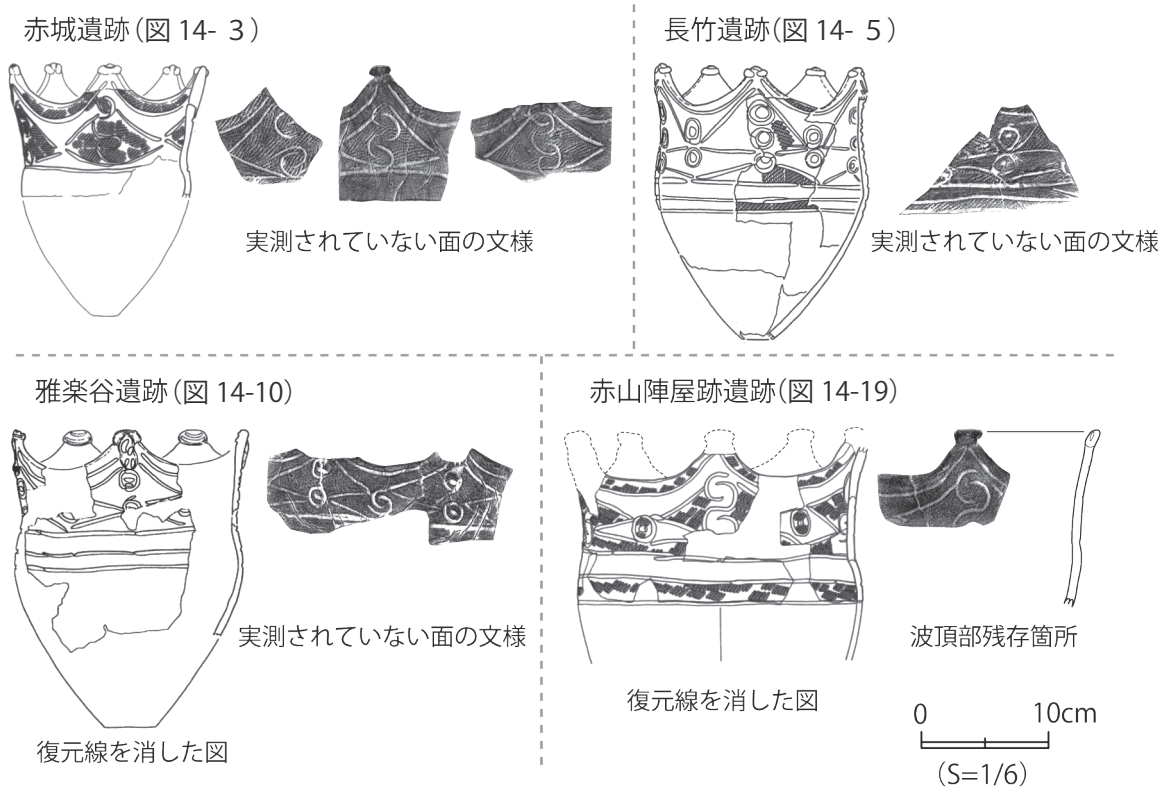


図 15 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器拓本図

(8) 赤山陣屋跡遺跡 (図 14-19)

S 字文であるが、姥山式とほぼ同じ文様構成である。実見した結果、別個体が無理やり接合されていることがわかり、類似した文様の土器が近位置から少なくとも 2 個体出土していることがわかった。さらに、復元線では菱形区画線が大きく曲がった曲線で描かれているが、実存している部分はそれほど大きく曲がってはならず、実際にどの程度の曲線であったかは残存部分からはわからないと判断した (図 15)。波頂部は、残存箇所から覆い被せるような貼付文と内側の凹みが確認できた。

(9) 東北原遺跡 (図 14-20・21)

20 は区画の頂点に施文された安行系の刻みを有する貼付文や、曲線による区画など、安行式の影響が強い。21 は豚鼻状の貼付文が菱形区画上にみられる以

外は姥山式と相違ない。

(10) 馬場小室山遺跡 (図 14-22・23)

22 は姥山式と相違ない。23 は区画の頂点に貼付文がある。

6-3. 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の考察

6-3-1. 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の分類

(1) 姥山式と捉えられるもの (図 14-4・5・9・21)  
文様構成をはじめ、波頂部貼付文など細部まで姥山式との相違はみられない。

(2) 一見した文様構成はほぼ姥山式と言えるが、細部に姥山式にはみられない安行式特有の要素、または、大宮台地独自の要素が認められるもの (図 14-3・6・10・14・19 など)

曲線的な文様区画線や弧線文、寸胴な器形、入組弧線文が崩れた蛇行状沈線といった、安行 3b 式に特徴的な要素、または典型的な姥山式にはみられない要素が一部混在している。特に、口頸部に施文された曲線的な区画線と弧線文が多く確認できる。鈴木らの指摘 (鈴木・鈴木 1982) のように、晩期安行式に伝統的な磨消弧線文の影響であると考えられる。飽くまで姥山式の文様構成をベースとしながらも、伝統的な安行式の要素が一部混合したものであると考えられる。

(3) 姥山式の要素と伝統的な安行式の要素が混在したキメラ土器と捉えられるもの (図 14-7・8・13・20)

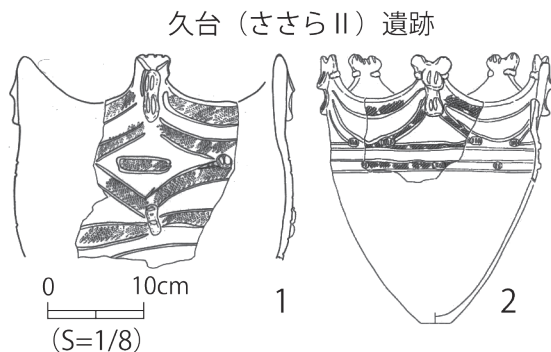
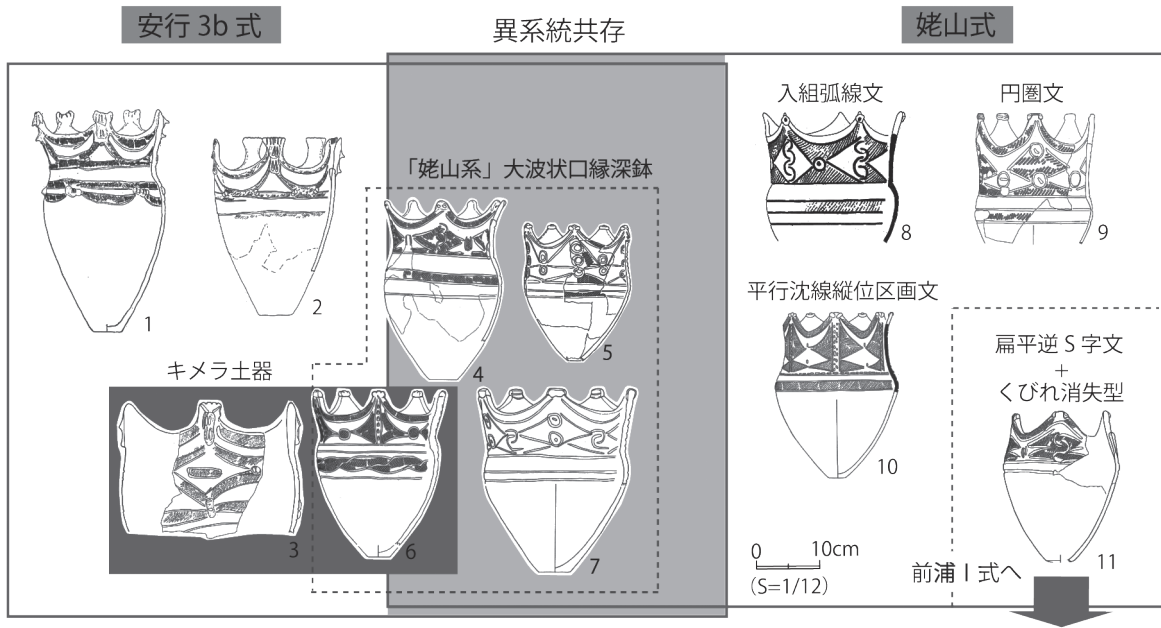


図 16 姥山式の影響がみられる安行 3b 土器



埼玉県域：寿能泥炭層遺跡（1・2） 久台遺跡（3） 赤城遺跡（4） 長竹遺跡（5） 高井東遺跡（6・7）  
千葉県域：加曾利貝塚（9） 多古田遺跡（10） 上宮田台貝塚（11） 茨城県域：築地遺跡（8）

図 17 安行 3b 式期の土器様相

姥山式の文様構成をベースとするキメラ土器は、破片を含めても非常に少ない。逆に久台遺跡例（図 16）のように安行 3b 式をベースとして菱形区画や鉢巻き状貼付文の影響を一部受けたと考えられるものも数点確認できた。他の分類と比較すると、明らかなキメラ土器は極めて少ないと言える。

### 6-3-2. 「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の捉え方

以上から、「姥山系」大波状口縁深鉢形土器とみなされる大宮台地出土資料のほとんどは、姥山式、または一部姥山式にはみられない在地的な要素によって変化した土器群であるということが出来る。よって、安行 3b 式期の時点では伝統的な安行系統と姥山系統という異なる系統のキメラ化はそれほど進んでいるとは言えず、「姥山系」という曖昧な括りにするよりも、純粋に大宮台地を姥山式の分布範囲として捉えた方が妥当であると考え。その上で、在地的な要素の混在を特徴として捉えるのが適切であるだろう。これまで、高井東遺跡出土のキメラ土器（図 14- 8）に研究者の注目が集まり、「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の代表的なものとして捉えられている印象があったが、実際にはキメラ土器の出土は非常に少ないという実態を認識することが重要であると考え。キメラ土器に関しては、姥山式をベースとするものだけでなく、安行 3b 式をベースとして菱形区画の影響を受けたタイプ（図 16）も同様に、出土量は決して多くない。

よって、「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の実態を踏まえて分布分析を振り返ると、大宮台地を含めた関

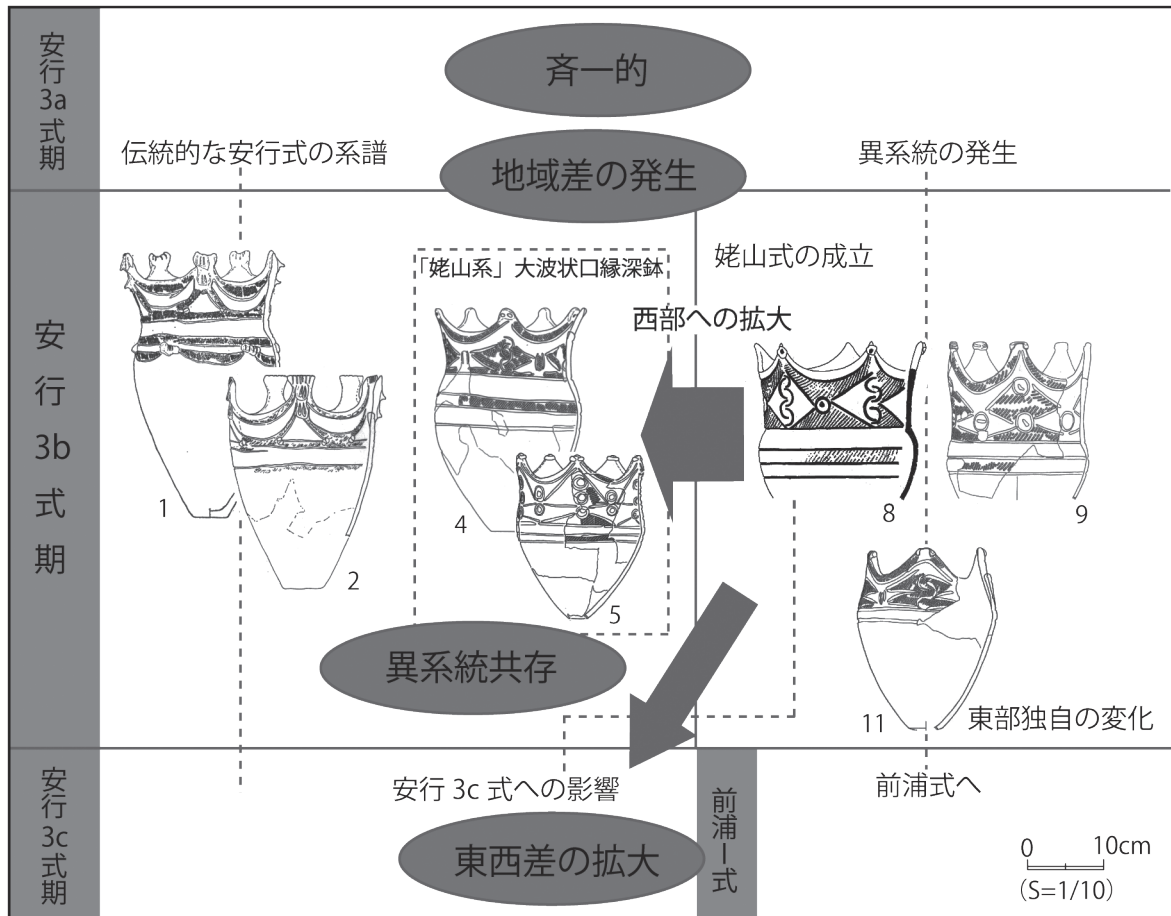
東地方の広範囲で安行 3b 式と姥山式という異系統が、一個体での要素の混在をそれほど進めず、それぞれの系統を独自に保ちながら共存している状態であることがわかった。

## 7. 安行 3b 式期の土器様相に基づく地域間関係

### 7-1. 安行 3b 式期の土器様相

本稿の分析結果を踏まえ、関東地方における安行 3b 式期の土器様相を整理する（図 17）。本稿では姥山式を「系統としての型式」と捉え、安行 3b 式との影響関係を検討した。姥山式大波状口縁深鉢形土器に特徴的な口頸部の入組弧線文・円圏文・平行沈線縦位区画文は同時期のバラエティとして様々に混合しながら存在しており、姥山式後半期になると胴部のくびれを消失した扁平な逆 S 字文を有するタイプの土器が出現する。本稿では触れられなかったが、このタイプは東部地域中心に分布し、器形や文様から前浦 I 式に変遷していくものであると考えられる。

大宮台地出土の「姥山系」大波状口縁深鉢形土器の詳細な文様分析の結果、その大半は姥山式と大きな相違がないことがわかった。安行 3b 式と姥山式という異系統は、要素の混在をそれほど進行させず、それぞれの系統を保ちながら共存していると言える。よって、大波状口縁深鉢形土器の分布分析から、姥山式の分布が大宮台地まで広範囲に広がり、異系統共存の状態になることが示された。詳細は別稿を予定しているが、筆者は姥山式が関東地方東部地域で独自に成立したと考えており、安行 3b 式期に次第に西側へと分布を拡



※土器の出土遺跡は、図 17 の番号に対応。

図 18 縄文時代晩期前半期の土器様相概略図

大していったことが予想される。

## 7-2. 土器様相に基づく地域間関係の考察

### 7-2-1. 東西関東の影響関係 (図 18)

縄文時代後期後葉からつづく伝統的な安行式を安行 3d 式まで引き継ぐのは、一貫して関東西部地域である。地域差が生じはじめる安行 3b 式期以降、西部地域が安行式の中心地であったことは間違いないが、必ずしも異系統である姥山式の影響力が弱く、伝統的な安行式の勢力が関東地方を席卷していたわけではなかった。後述するように、安行 3b 式という土器型式は前後の時期と比較し、非常に不安定な時期であると言える。関東東部地域には、姥山式しか確認できない地域が少なからず存在するなど、少なくとも土器様相からは、安行 3b 式期に西部地域の影響力が縮小している様子が読み取れる。本稿では触れられなかったが、姥山式は晩期中葉の土器群にも大きな影響を与えており、姥山式を単なる安行 3b 式の地域差として捉えるのではなく、同等以上の影響力を有する重要な土器型式の一つと捉えるべきであることが分析結果から明らかになった。姥山式を佐藤達夫の異系統土器論によって捉えたことが、非常に効果的であったことがわかる。

### 7-2-2. 安行式集団の揺らぎ

姥山式が出現する安行 3b 式期は、後期からつづく安行式の中でも特殊な時期であると言える。関東地方に広く分布し、多量に出土する安行 3a 式と比較し、分布圏は急速に縮小し、出土量も大幅に減少する。文様要素や出土状況による時期細別も難しく、前後の時期と比較し、継続期間はかなり短いことが予想される。伝統的な器形ではない砲弾状の器形が高い割合を占めるのも安行 3b 式期のみであり、土器様相の点からも不安定さがうかがえる。安行 3c 式期には一転、非常に安定的な土器型式にもどり、少なくとも 3 時期の細別が可能な時期幅を有しており、文様も西部地域独自の要素が次々と生み出される。

以上から、安行 3b 式が前後の時期と比較し、非常に不安定な土器型式であることが明らかである。土器型式の背景に何らかの集団を想定し、あえて集団という言葉を使用すると、安行 3b 式期には、安行式の集団に揺らぎが生じた時期であることが、土器様相から予想される。安行 3a 式から 3b 式に変遷する際に、何かしらの要因で安行式集団が不安定な状態に陥り、この揺らぎこそが、東部地域独自の変化を促し、東西地域差の発生や東部地域の勢力拡大の一因となった可

能性が指摘できる。安行 3b 式の成立過程について再検討し、その背景を探る必要がある。

### 7-2-3. 異系統共存状態の解釈

安行 3b 式期には、姥山式という異系統が共存している状態になる。齊一的な土器型式が広範囲に分布している場合は、土器という基本的な文化要素を共有しており、逆に、型式差や型式内の特徴差が地域ごとにある程度明確に分離している場合は、異なる文化要素を有していることから、地域間関係についても一つの枠組みとして捉えやすい。齊一的な土器型式が複数型式に分離した場合は、背景に考えられる何らかの集団が分離し、独自性の強まりや関係の希薄化等で説明できる場合が多い。それでは、安行 3b 式期の異系統共存状態は、どのような地域間関係として説明できるのだろうか。

異系統土器論の提唱者である佐藤達夫は、背景に婚姻等による製作者の移動を想定している。少量の異系統土器の混在は、搬入や模倣と捉えられることが主であるが、多量の混在やキメラ土器の出現は、たしかに製作者自身の移動と捉えるのが妥当かもしれない。しかし、モノやヒトの移動について厳密に論じるならば、より多角的な分析が必要になる。特に、製作技術や胎土、混和材の比較などは不可避である。本稿での分析における結論としては、安行 3b 式と姥山式という異系統土器の共存状態から、背景に想定される何らかの集団が明確な差異を有しながらも、密接な関係性にあったとするととどまる。

## 8. おわりに

本稿では、先行研究で非常に手薄であった姥山式の基礎研究を行い、現状で可能な限り土器型式の実態や位置づけを明らかにした。その上で、姥山式と安行 3b 式の影響関係について土器様相を明らかにし、そこに表れる東西関東の地域間関係について考察した。

今後検討すべき課題としては、第一に、姥山式の成立過程と晩期中葉の土器群への影響についての検討である。関東地方で地域差が生じ始め、型式差へと帰着するまでの過程とその背景の地域間関係を明らかにするという当初の目標のためには、この二つの検討が不可欠であり、すでに多くの分析を進めているため遠くから別稿を発表したい。

第二に、安行 3b 式の再検討である。本稿は姥山式を中心として検討を進めてきたが、当然ながら地域差出現の背景を検討するためには、安行 3b 式側からのより詳細な研究が不可欠である。安行 3b 式は安行式の中でも特に不安定な土器型式であり、その成立過程や型式内容を改めて検討する必要性を感じている。

第三に、細密沈線文をはじめとした姥山式の他器種の検討である。姥山式をより深く理解するためには、大きな特徴の一つである細密沈線文土器の検討は不可避である。本稿で扱った大波状口縁深鉢形土器以上に検討の少ない器種が多いため、今後基礎研究から進めていく必要がある。

最後に、土器型式研究そのものに関わる課題として、土器の様相が示す事象についての検討である。土器の分布や文様の関わり合いの背景に地域間の交流があることは間違いないが、モノや人の移動を伴う地域間関係をより具体的に叙述するためには、より詳細な土器研究をはじめ、他のあらゆる文化要素の検討が不可欠である。今後も多方面からの研究の蓄積を進めたい。

## 謝辞

本稿は、2019 年度に東京大学に提出した修士論文をもとに執筆したものであり、執筆にあたっては東京大学人文社会系研究科考古学研究室の設楽博己先生、佐藤宏之先生、福田正宏先生に大変多くの御指導を賜りました。また、資料調査では、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉市埋蔵文化財調査センター、佐倉市教育委員会、川口市教育委員会、埼玉県立さきたま史跡の博物館、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、以上の施設の皆様に多大なる御協力と御指導を賜りました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

## 註

- 1) 円文と呼ばれることもあるが、円の中に点が描かれるものが多いことを踏まえてか、姥山式の提唱当時から鈴木公雄が「円圏文」の呼称を用いているため、本稿では円圏文の呼称を踏襲する。
- 2) 晩期中葉の土器群に関しては、参考としての分析のため、時期の細別をせず大まかな分布の把握を行った。

## 参考文献

- 青木義脩・岩井重雄・小倉均 1983 『馬場(小室山)遺跡(第5次)』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第3集
- 青木義脩・柳田博之・山田尚友 1996 『前窪遺跡発掘調査報告書(第3次)』浦和市遺跡調査会報告書 第213集
- 赤熊浩一・矢部瞳・上野真由美編 2014 『長竹遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第413集
- 荒時克一郎 2013 『上境旭台貝塚3』茨城県教育財団文化財調査報告第368集
- 新屋雅明 1991 「大宮台地における縄文時代後期末から晩期初頭の土器群について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 393-414
- 新屋雅明 1992 「大宮台地出土土器を中心とした安行式土器の編年」『シンポジウム縄文後・晩期安行発表要旨』埼玉考古学会「土偶とその情報」研究会, 9-17
- 新屋雅明 1996 「埼玉地域の安行 3c 式」『下津弘君・塚越哲也君追悼論文集 埼玉地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会, 233-253



- 新屋雅明 2004 「埼玉周辺の晩期中葉の様相」『第 17 回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会, 1-60
- 新屋雅明 2008 「晩期安行式土器」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会, 716-723
- 新屋雅明編 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 74 集
- 新屋雅明編 2000 『川口市石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 254 集
- 新屋雅明・菊地真編 2007 『蓮田市 久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 339 集
- 池田大助・宮重行編 2016 『四街道市嶋越遺跡(2) 旧石器時代～弥生時代編』千葉県教育振興財団調査報告第 749 集
- 石田守一編 2014 『下ヶ戸貝塚Ⅰ 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書Ⅰ』我孫子市埋蔵文化財報告第 48 集
- 石田守一編 2015 『下ヶ戸貝塚Ⅱ 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書Ⅱ』我孫子市埋蔵文化財報告第 50 集
- 石田守一編 2016 『下ヶ戸貝塚Ⅲ 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書Ⅲ』我孫子市埋蔵文化財報告第 54 集
- 石橋宏克・新田浩三 1991 『銚子市余山貝塚』千葉県文化財センター調査報告第 197 集
- 上野真由美編 2005 『蓮田市 雅楽谷遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 307 集
- 江原英編 1997 『寺野東遺跡Ⅴ(縄文時代環状盛土遺構・水場の遺構編-1)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 200 集
- 江原英編 1998 『寺野東遺跡Ⅳ(縄文時代谷部編-1)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 208 集
- 江原英編 2017 『刈沼遺跡・刈沼向原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 388 集
- 江原美奈子 2012 『上境旭台貝塚 2』茨城県教育財団文化財調査報告第 364 集
- 江原美奈子 2016 「縄文時代後期後半から晩期前半に見られる東北系文様の受容と変化—姥山Ⅱ式波状口縁深鉢の成立に関する予察—」『研究ノート』13: 9-17
- 江原美奈子他 2018 『築地遺跡 宮原前遺跡 2』茨城県教育財団文化財調査報告第 427 集
- 大関武・江原美奈子 2009 『本田遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第 313 集
- 大塚達朗 2000 「異系統土器論としてのキメラ土器論—滋賀里遺跡出土土器の再吟味—」『異貌』18: 2-19
- 小川和博他 2009 『神立平遺跡』土浦市教育委員会
- 奥野麦生 1998 『前田遺跡 町内遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』白岡町埋蔵文化財調査報告書第 9 集
- 奥野麦生 2012 『入耕地遺跡—第 4・7 地点—』白岡町遺跡調査報告書第 10 集
- 奥野麦生・杉山和徳 2014 『前田遺跡(第 2 地点)』白岡市埋蔵文化財調査報告書第 23 集
- 小倉和重編 2009 『千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡(旧石器時代編)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 266 集
- 小倉和重・猪股佳二 2008 『平成 18 年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡(第 13 次)』
- 小倉均・関根俊雄 2012 『真福寺貝塚(C 地点)』さいたま市埋蔵文化財調査報告書第 7 集
- 小倉和重・高谷英一 2015 『平成 26 年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡(第 1 次・2 次)』
- 忍澤成規 1995 『千葉県市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 55 集
- 折原繁他 1978 『築地台遺跡・平山古墳』千葉県文化財センター金箱文夫編 1983 『宮谷貝塚遺跡』川口市遺跡調査報告第 4 集
- 金箱文夫編 1989 『赤山』川口市遺跡調査報告第 12 集
- 喜多裕明編 2011 『千葉県印西市道作 1 号墳(第 2 次)・馬場遺跡第 5 地点(第 1 次・第 2 次)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 295 集
- 國學院大学考古学会 1963 「埼玉県大宮市奈瀬戸遺跡展」『若木考古』68: 1-8
- 小林和彦 2015 『上境旭台貝塚 4』茨城県教育財団文化財調査報告第 397 集
- 小林清隆・服部智至編 2017 『東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡』千葉県教育振興財団調査報告第 758 集
- 近藤敏 1987 『千葉県市原市 菊間手遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 23 集
- 埼玉県遺跡調査会 1974 『高井東遺跡報告書(本文編・図版編)』埼玉県遺跡調査報告第 25 集
- 埼玉県立博物館編 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編(遺構・遺物)—』
- 財団法人茨城県教育財団 1981 『冬木 A 貝塚・冬木 B 貝塚』茨城県教育財団調査報告Ⅹ
- 佐藤達夫 1974 「縄紋式土器 二 土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館, 81-102
- 柴山正広ほか 2009 『上境旭台貝塚』茨城県教育財団文化財調査報告第 325 集
- 島立桂・蜂屋孝之・服部智至 2014 『市川市道免き谷津遺跡第 1 地点(3)』千葉県教育振興財団調査報告第 729 集
- 清水潤三・鈴木公雄 1966 「真福寺遺跡泥炭層出土の土器に就いて」『史学』39(2): 1-40
- 庄野靖寿・立木新一郎 1967 「岩槻市裏慈恩寺遺跡発掘調査報告」『埼玉考古』5: 34-57
- 白石竹雄・天野努 1981 『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会
- 菅谷通保編 2003 『千葉県茂原市下太田貝塚』財団法人総南文化財センター調査報告第 50 集
- 杉原荘介・戸沢充則 1963 「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』3(2): 17-48
- 杉原荘介・戸沢充則・大塚初重・小林三郎 1964 「千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器」『駿台史学』15: 76-100
- 杉原荘介・戸沢充則 1965 「千葉県堀之内貝塚 B 地点の調査」『考古学集刊』3(1): 15-36
- 杉原壯介編 1976 『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 椛山林継・金子裕之 1972 「千葉県富士見台遺跡の調査」『考古学雑誌』58(3): 65-88
- 鈴木加津子 1981 「茨城県取手市上高井神明貝塚に於ける縄紋式後晩期の土器に就いて」『利根川』1: 6-7
- 鈴木公雄 1963 「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』36(1): 67-94
- 鈴木公雄 1964a 「姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題」『史学』37(1): 69-96
- 鈴木公雄 1964b 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21: 1-5
- 鈴木公雄 1965 「千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』38(1): 103-125
- 鈴木公雄 1981 「縄文晩期の土器 関東地方」『縄文土器大成 4 晩期』講談社, 144-149
- 鈴木公雄 1982 「第 2 章縄文時代 第 5 節多古田泥炭層遺跡」『八

- 日市場市史 上巻』八日市場市史編さん委員会, 28-77
- 鈴木正博・鈴木加津子 1979 『取手と先史文化—中妻貝塚の研究—上巻』茨城県取手市教育委員会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1981 『取手と先史文化—中妻貝塚の研究—下巻』茨城県取手市教育委員会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行 3b 式研究の序—山内清男博士の学説から鈴木公雄氏の新説を批判する—」『土曜考古』5: 107-116
- 鈴木正博・鈴木加津子 1983 「安行式遺蹟解題(1)—埼玉県岩槻市裏慈恩寺遺跡の分析—」『土曜考古』7: 23-46
- 清藤一順編 1981 『千葉県千葉市矢作貝塚』千葉県文化財センター
- 関口彦彦・西野雅人 2007 『千葉市六通貝塚』千葉県教育振興財団調査報告第 572 集
- 曾根原裕明編 1986 『中橋場遺跡発掘調査報告書 飯能の遺跡(5)』飯能市教育委員会
- 鷹野光行 1978 「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』64(3): 1-22
- 田代治他 1999 『東北原遺跡(第 4 次調査)』大宮市文化財調査報告第 46 集
- 田中大介・西原崇浩編 2016 『山野貝塚総括報告書—房総半島に現存する最南部の縄文時代後・晩期の大型貝塚—』袖ヶ浦市教育委員会
- 近森正・藤村東男・山岸良二編 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会
- 鶴岡英一・忍澤成視 2007 『市原市西広貝塚Ⅲ』市原市文化財調査センター調査報告書第 2 集
- 戸沢充則・半田純子 1966 「茨城県法堂遺跡の調査—「製塩址」をもつ縄文時代晩期の遺跡—」『駿台史学』18: 298-336
- 戸谷敦司編 2004 『千葉県佐倉市 井野長割遺跡(第 4 次調査)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 205 集
- 永松実・斎藤隆・渡辺昌宏編 1976 『小山台貝塚』図書刊行会
- 新座市教育委員会市史編さん室編 1984 『新座市史 第一巻 自然・考古・古代中世資料編』
- 西野雅人・米倉貴之編 2017 『史跡加曾貝塚 総括報告書』千葉市教育委員会
- 西村正衛 1961 「千葉県成田市荒海貝塚—東部関東地方縄文文化終末期の研究—(予報)」『古代』36: 1-18
- 野田市教育委員会編 2003 『野田貝塚—第 17・18 次発掘調査—』野田市埋蔵文化財調査報告書第 24 冊
- 橋本勉 1985 『ささら(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 47 集
- 橋本勉編 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 93 集
- 服部智至・小川慶一郎編 2019 『市川市道免き谷津遺跡第 1 地点(12)・(13)、第 4 地点、第 5 地点、新山遺跡第 23 地点、24 地点』千葉県教育振興財団調査報告第 781 集
- 早川智明他 1969 『奈良瀬戸遺跡』大宮市教育委員会
- 林田利之 1999 『千葉県佐倉市吉見台遺跡 A 地点(本文編)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 159 集
- 吹野富美夫編 1999 『前田村遺跡 G・H・I 区(中巻)』茨城県教育財団文化財調査報告書第 146 集
- 福田礼子 2006 「第 4 章 考察 姥山Ⅱ、Ⅲ式の源流—小地域の変遷から—」『国指定史跡上高津貝塚 C 地点』土浦市教育委員会, 149-162
- 藤本弥城 1988 「茨城県広畑貝塚出土の晩期縄文土器」『考古学雑誌』73(4): 1-35
- 古谷涉編 2001 『千葉市内野第一遺跡発掘調査報告書 第Ⅱ分冊』千葉市文化財調査協会
- 細田勝編 2018 『小林八束遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 442 集
- 堀越正行・領塚正浩編 1992 『市立市川考古博物館研究調査報告 第 5 冊 堀之内貝塚資料図譜』市川市立考古博物館
- 松丸信治 2012 「前浦式土器の再検討—千葉県における縄文時代晩期中葉の土器編年の構築—」『古代』128: 49-69
- 三沢正善編 1982 『栃木県小山市 乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第 11 集
- 三田村美彦 1990 『小深作遺跡発掘調査報告—第 3 次調査—』大宮市文化財調査報告第 28 集
- 峰村篤・須賀博子 2016 『上本郷遺跡第 8・15・16 地点 発掘調査出土資料報告書(2)』松戸市文化財調査報告第 62 集
- 宮内慶介 2011 「姥山Ⅱ式平縁深鉢形土器の成立と系譜—明治大学博物館所蔵八木原貝塚採集資料を基礎として—」『駿台史学』142: 59-83
- 宮崎朝雄編 1976 『黒谷田端前遺跡』岩槻市遺跡調査会
- 宮田毅 1990 「群馬県板倉遺跡出土の「前浦式直前型式」に先行する土器について」『利根川』11: 37-42
- 宮田毅 1992 「群馬県における晩期初頭から中葉の土器」『第 5 回縄文セミナー—縄文晩期の諸問題』縄文セミナーの会, 53-75
- 村田章人 2004 「さいたま市寿能泥炭層遺跡出土安行 3b 式波状口縁深鉢の口縁部文様に関する考察」『埼玉県立博物館紀要』29: 15-28
- 村田章人・藤沼昌泰編 2007 『後谷遺跡 第 4 次発掘調査報告書 第 3 分冊』桶川市教育委員会
- 安井健一 2010 『袖ヶ浦市上宮田台遺跡 2(旧石器・縄文時代)』千葉県教育振興財団調査報告第 638 集
- 安井健一編 2005 『市原市西広貝塚Ⅱ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 93 集
- 柳田博之・青木義脩 2015 『馬場小室山遺跡(第 32 次)』さいたま市遺跡調査会報告書第 163 集
- 山形洋一他 1985 『東北原遺跡発掘調査報告 第 6 次調査』大宮市文化財調査報告第 19 集
- 山形洋一他 1993 『深作稻荷台遺跡 東北原遺跡—第 9 次調査—』大宮市遺跡調査報告
- 山内清男 1928 「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43(10): 463-464
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1(3): -19
- 山内清男 1932 「縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1(4): 40-43
- 山内清男 1934 「真福寺貝塚の再吟味」『ドルメン』3(12): 34-41
- 山内清男 1936 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1(4): 137-146
- 山内清男 1940 「安行式土器(前半)」『日本先史土器図譜』第 VII 輯 先史考古学会, 19-21
- 山内清男 1941 「安行式土器(後半)」『日本先史土器図譜』第 X 輯 先史考古学会, 28-30
- 山内清男 1964 「縄文土器・総論」『日本原始美術 1』講談社, 148-158
- 八幡一郎編 1973 『東京教育大学文学部考古学研究报告Ⅱ 貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室
- 八幡一郎編 1973 『東京教育大学文学部考古学研究报告Ⅱ 貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室
- 横堀孝徳 1997 『前田村遺跡 C・D・E 区(上巻)』茨城県教育財

団文化財調査報告書第 116 集

- 吉田健司・鈴木加津子 1992 『精進場遺跡(1)』川口市文化財調査報告書第 30 集  
 吉田健司・鈴木加津子・土肥孝 1993 『精進場遺跡(2)』川口市文化財調査報告書第 31 集  
 吉田稔・渡辺清志編 2018a 『長竹遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 440 集  
 吉田稔・渡辺清志編 2018b 『長竹遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 441 集  
 吉野健一他 2007 『君津市三直貝塚』千葉県教育振興財団調査報告第 533 集  
 米内邦雄・宮入和博 1972 『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会  
 米田耕之助他編 1977 『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ  
 余山貝塚資料図譜編集委員会編 1986 『余山貝塚資料図譜』國學院大學考古学資料館  
 渡辺清志編 2007 『熊谷市 諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 336 集

挿図出典

- 図 1・4・7・11～13、表 1～4：筆者作成  
 図 2：1～3・6～11・13～15・17～20・28～31・34～43・46～49・53～57：鈴木 1964a、4：鈴木 1963、5・12・21～25・44・45・50～52：鈴木 1982、16・26・27・32・33：鈴木 1965

- 図 3：鈴木・鈴木 1982 に加筆  
 図 5：鈴木 1964b  
 図 6：佐藤 1974、大塚 2000 をもとに筆者作成  
 図 7：鈴木・鈴木 1983 をもとに筆者作成  
 図 8：1964a に加筆  
 図 9：1：鈴木 1964a、2・18・26：西野・米倉編 2017、3：鈴木 1982、4：安井 2010、5・9：島立ほか 2014、6・13・14・21～23・27・28：小倉編 2009、7・8：八幡編 1973、10：関口・西野 2007、11・12：石田編 2015、15・16・19・20・24：喜多編 2011、17：鈴木 1965、25：江原 2012  
 図 10：埼玉県立博物館編 1984  
 図 14：1～3：新屋編 1988、4～7：吉田・八幡編 2018b、8・9：埼玉県遺跡調査報告会 1974、10：橋本編 1990、11・12：上野編 2015、13：宮崎 1976、14～16：新屋・菊地編 2007、17・18：早川他 1969、19：金箱編 1989、20・21：田代他 1999、22：柳田・青木 2015、23：青木他 1983、24：鈴木 1964a、25：奥野 2012、26：奥野 1998  
 図 15：図 14 の番号に対応、拓本図は筆者作成  
 図 16：1：新屋・菊地 2007、2：橋本 1985  
 図 17：1・2：埼玉県立博物館編 1984、3：新屋・菊地 2007、4：新屋編 1988、5：吉田・渡辺編 2018b、6・7：埼玉県遺跡調査会 1974、8：鈴木 1964a、9：西野・米倉編 2017、10：鈴木 1982、11：安井 2010  
 図 18：図 17 の番号に対応

## **Consideration to the East-West relationship in Kanto area at the end of the Jomon period**

### **-on the base of the study of Ubayama type pottery-**

Eri TANABE

At the end of the Jomon period, the distribution of the pottery in Kanto area shows the difference between east area and west area. The pottery of the west side is called Angyo-3b type, and that of the east side is called Ubayama type. Before then, the similar pottery has been distributed in the almost all of the Kanto area. It means that during the term of Angyo-3b type pottery, the relationship between west and east side has changed. This term is very important in considering the regional relationships. However, the studies about this term, in particular Ubayama type pottery, are very few. Therefore, the purpose of this paper is revealing the East-west relationship at the end of the Jomon period by examining Ubayama type pottery.

First, this paper explains the definition of Ubayama type pottery. It has been discussed that Ubayama type is a 'type' or a part of Angyo-3b type. Using Sato Tatsuo's theory, the position in the pottery chronology of Ubayama type is clarified. Based on the definition, this paper confirms the context of the Ubayama type pottery by examining many potteries that are excavated recently. Second, the analysis of the distribution shows the situation that Angyo-3b type and Ubayama type are distributed at the same area in a wide range. On the other hand, the observation of the potteries distributed in Omiya tableland proves that the features of Angyo-3b type and Ubayama type pottery are mixed rarely in a pottery.

Consequently, the result of the analysis of potteries shows the regional relationship that the influence of the east side extends to the west area. In the west side, the influence has been smaller and it is supposed that the unstable of the context of Angyo-3b type pottery is associated. The distribution of potteries as above suggests that many people including pottery makers move actively and widely.